

レジストリガイド

iPlanet™ Application Server

Version 6.5

2002 年 2 月

Copyright © 2002, Sun Microsystems, Inc., 901 San Antonio Road, Palo Alto, California 94303, U.S.A. All rights reserved.

Sun Microsystems, Inc. は、この製品に含まれるテクノロジーに関する知的所有権を保持しています。特に限定されることなく、これらの知的所有権は <http://www.sun.com/patents> に記載されている 1 つ以上の米国特許および米国およびその他の国における 1 つ以上の追加特許または特許出願中のものが含まれている場合があります。

本製品は著作権法により保護されており、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。Sun および Sun のライセンサーの書面による事前の許可なく、本製品および関連する文書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。

フォントテクノロジーを含む第三者のソフトウェアの著作権は Sun の提供者により保護されており、ライセンス許諾されています。

Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴマーク、Java、Solaris、iPlanet、および iPlanet のロゴマークは、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc.(以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標もしくは登録商標です。

すべての SPARC の商標はライセンスに基づいて使用され、米国およびその他の国における SPARC International, Inc. の商標もしくは登録商標です。SPARC の商標に関連する製品は Sun Microsystems, Inc. によって開発されたアーキテクチャに基づいています。

UNIX は、X/Open Company, Ltd が独占的にライセンスしている米国およびその他の国における登録商標です。

この製品には Apache Software Foundation (<http://www.apache.org/>) により開発されたソフトウェアが含まれています。Copyright © 1999 The Apache Software Foundation. All rights reserved.

Federal Acquisitions: Commercial Software - Government Users Subject to Standard License Terms and Conditions.

目次

iPlanet Application Server レジストリ	7
レジストリを使ったコンポーネントのデバッグ	12
ClassDef パラメータ	13
ClassImp パラメータ	16
トップレベル (6.5) パラメータ	17
管理パラメータ	18
クラスタパラメータ	20
Clusters セクション	20
メッセージ駆動の Bean パラメータ	22
CCS0 セクション	22
CGI パラメータ	23
CONN パラメータ	23
データベースパラメータ	24
DataSources	25
Drivers	26
ドライバ固有のレジストリパラメータ	27
DAE3	29
EB パラメータ	30
EJB-Components パラメータ	32
エンジンパラメータ	33
EVENTS パラメータ	35
EVENTS2 パラメータ	36
エクステンションパラメータ	38
HTTPAPI パラメータ	39
HTTPLOG パラメータ	45
ロードバランスパラメータ	46
ログパラメータ	52

MSGDB パラメータ	56
コンポーネントリクエストマネージャとパスパラメータ	57
ステートパラメータ	61
セキュリティパラメータ	61
ACL データベース	61
Principal データベース	62
コンポーネント ACL	63
暗号化	63
デフォルトアクセス	64
TXNMGR パラメータ	66
データソースパラメータ	68
登録されたデータソースを削除するには	68
配置パラメータ	71
GMS パラメータ	72
J2EE-Application	73
J2EE-Module	73
Java パラメータ	74
National Language Support パラメータ	75
IASAT パラメータ	75
jndiConfig パラメータ	77
デバッグパラメータ	78
コマンドラインツール	81
beanreg	81
build	81
charsetconv	81
convert2jsp11	81
convertNtv2Xml	82
convertProps2Xml	82
dbsetup	82
deploycmd	82
deploytool	82
dsreg	83
ejbc	83
ejbreg	83
iascontrol	84
iasdeploy	85
アプリケーションサービンスタンスの指定	86
deployapp	87
deploymodule	87
removeapp	88
removemodule	88
regdatasource	88
help	89

idlj	89
j2eeappreg	90
JDBCSWITCH_NAS21	90
jdbcsetup	90
kas	90
kcs	91
kjs	91
kreg	92
kregedit	92
ksvradmin	92
kxs	92
ldap	93
ldapdelete	94
ldapmodify	95
ldapsearch	97
productversion	99
resreg	99
rmic	99
servletReg	100
webappreg	101
version	101

iPlanet Application Server レジストリ

iPlanet Application Server 6.5 のレジストリには、インストールされている iPlanet Application Server の設定やトラブルシューティングを行うために必要なすべての情報が含まれています。このマニュアルでは、レジストリのパラメータについて、プログラムセクションまたはモジュールごとに一覧で説明します。

レジストリは、キーと呼ばれるノードのツリーです。各キーには名前があり、0 以上の値、および 0 以上のサブキーに関連付けられています。各値には名前があり、1 つのタイプ、およびそのタイプの 1 つの値と関連付けられています。レジストリキーは LDAP エントリにマップされ、レジストリ値は LDAP 属性にマップされます。

警告 レジストリ内には、このマニュアルに記載されていないキーも多少あります。そのようなキーは内部使用専用なので、変更しないでください。

ディレクトリサーバには 20 以上のキーが格納され、このマッピング情報は GDS¥Subtreemaps の下のローカルレジストリに格納されます。したがって、マップされた GDS サブツリーにアクセスするモジュールは、LDAP バックエンドへ透過的にアクセスします。

表 1 Directory Server に格納されるレジストリパラメータ

構成の設定	参照する節	定義
ClassDef	12 ページの「レジストリを使ったコンポーネントのデバッグ」	すべての iPlanet Application Server マシンで使うすべての登録アプリケーション
NameTrans	12 ページの「レジストリを使ったコンポーネントのデバッグ」	iPlanet Application Server およびそれに対応する GUID に登録されたすべてのアプリケーションに対してユーザが指定した名前のリスト

表 1 Directory Server に格納されるレジストリパラメータ (続き)

構成の設定	参照する節	定義
Clusters	20 ページの「クラスタパラメータ」	iPlanet Application Server クラスタとクラスタ内のサーバ
6.5¥ACL	61 ページの「セキュリティパラメータ」	iPlanet Application Server で使われるアクセス制御リスト (ACL) のリスト
6.5¥PRINCIPAL	61 ページの「セキュリティパラメータ」	設置されているすべての iPlanet Application Server マシンのユーザとグループのセキュリティ情報
6.5¥EJB-Components	32 ページの「EJB-Components パラメータ」	Enterprise JavaBeans の名前と GUID を含む
6.5¥GMS	72 ページの「GMS パラメータ」	Global Message Service (GMS) マルチキャストパラメータ。ロードバランスに使われる
6.5¥NLS	75 ページの「National Language Support パラメータ」	NLS (National Language Support) の内部環境設定
6.5¥CCS0¥DAE¥DataSources	24 ページの「データベースパラメータ」	各ドライバの定数フラグとそれに関連付けられた各フラグの構成設定のリスト
6.5¥CCS0¥DAE2¥DataSources	24 ページの「データベースパラメータ」	(JDBC) 各ドライバの定数フラグとそれに関連付けられた構成設定のリスト
6.5¥CCS0¥DAE3¥DataSources	24 ページの「データベースパラメータ」	(JDBC) 各サードパーティドライバの定数フラグとそれに関連付けられた構成設定のリスト。アプリケーションサーバに関連付けることができるサードパーティドライバは最大 3 つ
6.5¥CCS0¥EB	30 ページの「EB パラメータ」	エンティティ Beans 管理を制御するパラメータのリスト
6.5¥CCS0¥EXTENSIONS (UNIX)	38 ページの「エクステンションパラメータ」	サーバの起動時に iPlanet Application Server に読み込まれるエクステンション
6.5¥CCS0¥Extensions (Windows)		

表 1 Directory Server に格納されるレジストリパラメータ (続き)

構成の設定	参照する節	定義
6.5¥CCS0¥LOADB	46 ページの「ロードバランスパラメータ」	リクエストの均衡方法を制御するロードバランスパラメータ
6.5¥CCS0¥REQ	57 ページの「コンポーネントリクエストマネージャとパスパラメータ」	スレッドプールのスレッド設定に使うリクエストマネージャの設定
6.5¥CCS0¥Security	61 ページの「セキュリティパラメータ」	暗号化パラメータ (暗号化エクステンションだけで使用)

表 2 (reg.dat) ローカルレジストリに格納されるレジストリパラメータ

構成の設定	参照する節	定義
ClassImp	12 ページの「レジストリを使ったコンポーネントのデバッグ」	iPlanet Application Server が使う、登録されたすべてのコンポーネントを含む
GDS	このマニュアルの序文	Directory Server に格納される値へのマッピングを含む
NameTrans	12 ページの「レジストリを使ったコンポーネントのデバッグ」	iPlanet Application Server に登録されているすべてのコンポーネントとそれに対応する GUID (グローバルに固有な識別子) に対してユーザが指定した名前のリストを含む
6.5¥Top-level parameters	17 ページの「トップレベル (6.5) パラメータ」	iPlanet Application Server とアプリケーションディレクトリ情報を含む
6.5¥Admin	18 ページの「管理パラメータ」	Application Server の管理パラメータを含む
6.5¥CCS0¥CGI	23 ページの「CGI パラメータ」	サポート中止
6.5¥CCS0¥CONN	23 ページの「CONN パラメータ」	スレッド接続のパラメータ
6.5¥CCS0¥ClusterName	20 ページの「クラスタパラメータ」	サーバクラスタの名前を含む

表 2 (reg.dat) ローカルレジストリに格納されるレジストリパラメータ (続き)

構成の設定	参照する節	定義
6.5¥CCS0¥ENG	33 ページの「エンジンパラメータ」	エンジンパラメータはさまざまな iPlanet Application Server エンジンのランタイムモデルを定義する
6.5¥CCS0¥EVENTS	35 ページの「EVENTS パラメータ」	以前のバージョンの iPlanet Application Server で登録されたアプリケーションイベントを含む
6.5¥CCS0¥EVENTS2	36 ページの「EVENTS2 パラメータ」	iPlanet Application Server API の AppLogic を使って登録されたアプリケーションイベントを含む
6.5¥CCS0¥HTTPAPI	39 ページの「HTTPAPI パラメータ」	iPlanet Application Server と通信する Web コネクタで使われる情報を含む
6.5¥CSS0¥HTTPLOG	45 ページの「HTTPLOG パラメータ」	ログに記録されるアプリケーションサーバのホストとポート番号、および HTTPLOG ログエントリをトリガする入力変数を含む
6.5¥CCS0¥LOGGING	52 ページの「ログパラメータ」	iPlanet Application Server のメッセージと HTTP Web サーバのメッセージを記録する機能を制御できるようにする
6.5¥CCS0¥MSGDB	56 ページの「MSGDB パラメータ」	ローカリゼーションに使われる。この値にはメッセージのデータファイルの場所が含まれる
6.5¥CSS0¥POOLS	57 ページの「コンポーネントリクエストマネージャとパスパラメータ」	サードパーティデータベースプールのパラメータ
6.5¥CCS0¥QUERY	57 ページの「コンポーネントリクエストマネージャとパスパラメータ」	iPlanet Application Server が SQL 照会ファイル (.gxq) を検索して読み込むために使うルートパスのリスト
6.5¥CCS0¥RESOURCEMGR	57 ページの「コンポーネントリクエストマネージャとパスパラメータ」	データベースバックエンドに接続しているリソースマネージャのパラメータ
6.5¥CCS0¥SYSTEM_JAVA	57 ページの「コンポーネントリクエストマネージャとパスパラメータ」	KJS がコンポーネントを検索して読み込むために使うルートパスのリスト

表 2 (reg.dat) ローカルレジストリに格納されるレジストリパラメータ (続き)

構成の設定	参照する節	定義
6.5¥CCS0¥State	61 ページの「ステートパラメータ」	Executive Server のホストと IP アドレス
6.5¥CCS0¥TEMPLATE	57 ページの「コンポーネントリクエストマネージャとパスパラメータ」	実行時サーバがテンプレートファイルを検索して読み込むために使うパスのリスト
6.5¥CCS0¥TXNMGR	66 ページの「TXNMGR パラメータ」	トランザクションマネージャのログのパラメータ
6.5¥DataSource	68 ページの「データソースパラメータ」	Application Server で登録されるすべてのデータソースのリスト
6.5¥Deployment	71 ページの「配置パラメータ」	Deployment Management ツールの設定を含む
6.5¥J2EE-Application	73 ページの「J2EE-Application」	Application Server で登録されたすべての J2EE アプリケーションの ACL ロール名とアプリケーションパスを含む
6.5¥J2EE-Module	73 ページの「J2EE-Module」	Application Server で登録されたモジュールについてのメタ情報を含む。System キーおよび Boot キーは変更しないでください
6.5¥Java (Windows のみ)	74 ページの「Java パラメータ」	Java クラス、ライブラリ、および JVM へのパスのリスト。起動時に Java エンジンに送信する Java 引数も設定できる
6.5¥IASAT	75 ページの「IASAT パラメータ」	Administration Tool のログインと設定の情報を含む
6.5¥jndiConfig	77 ページの「jndiConfig パラメータ」	ネーム空間の JNDI ハンドルのリスト
デバッグパラメータ	78 ページの「デバッグパラメータ」	この節では、テスト中にログエントリを取得するために、レジストリのさまざまなセクションでデバックパラメータを設定する場所について説明する

このマニュアルのリストにあるパラメータはすべて、レジストリの次の領域にあります。

Windows NT

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥

UNIX

¥SOFTWARE¥iPlanet¥

Windows NT

Windows NT の場合は、コマンドラインで `kregedit` と入力するか、Windows の `regedit` コマンドまたは `regedt32` コマンドを使ってレジストリを開きます。

UNIX

UNIX の場合は、コマンドラインで `kregedit` と入力してレジストリを開きます。

レジストリを使ったコンポーネントのデバッグ

コンポーネント (Servlet や EJB) を登録すると、レジストリの次の 3 つのセクションが更新されます。

- ClassDef
- ClassImp
- NameTrans

NameTrans パラメータは、iPlanet Application Server に登録されているすべてのコンポーネントと、それに対応する GUID (グローバルに固有な識別子) に対してユーザが指定した名前のリストで構成されます。ClassDef と ClassImp パラメータについては、このマニュアルの 13 ページと 16 ページで説明します。

これらの値は、Administration Tool のアプリケーション画面で変更できます。通常、レジストリを手動で編集する必要はありません。

開発者が iPlanet Application Builder 環境以外でコードを記述する場合、そのコンポーネントの GUID を登録する必要があります。開発者は `iasdeploy` を使ってコンポーネントを登録します。

注 コンポーネントの実行時に GXBinder エラーが発生した場合、問題のデバッグはレジストリのこれら 3 つの領域の見直しから始めます。

ClassDef パラメータ

ClassDef セクションには、iPlanet Application Server インストールで使う、登録されたすべてのコンポーネントが含まれています。各 GUID (グローバルに固有な識別子) には、アプリケーションコンポーネントまたはシステムで登録されたモジュールが記述されます。コンポーネントが iPlanet Application Server で正しく登録されている場合は、対応する ClassDef エントリがあります。

ClassDef の下に GDS (グローバルディレクトリサービス) フォルダがある場合もあります。GDS フォルダがあるのは、コンポーネントが複数のサーバにロードバランスされている場合です。各フォルダの下に、GDS という名前のサブフォルダがあります。GDS キー内の各エントリは、このコンポーネントを管理する iPlanet Application Server の場所です。形式は次のとおりです。

IP:port number=[is sticky lis enabled]

127.0.0.1 という IP アドレスは、そのコンポーネントがサーバに対してローカルであることを表します。

255.255.255.255 という IP アドレスは、そのコンポーネントがグローバルであることを表します (つまり、そのコンポーネントはすべての iPlanet Application Server サーバ上で実行可能)。255.255.255.255 の設定は、Administration Tool から行うことはできません。

その他の IP アドレスの値は、コンポーネントが iPlanet Application Server サーバ間で分散される (ロードバランスが行われる) ことを表します。is_enabled=1 の場合、そのコンポーネントはサーバ上で有効です。is_sticky=0x80000001 の場合、そのコンポーネントではスティッキーロードバランスが行われます。

is_sticky=0x00000001 の場合、そのコンポーネントではスティッキーロードバランスが行われません。

登録されているコンポーネントはすべて、次の領域に一覧表示されます。

Windows NT

```
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥ClassDef
```

UNIX

```
¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥ClassDef
```

登録されているコンポーネントは、その GUID (グローバルに固有な識別子) を使ってレジストリに表わされます。

表 3 レジストリの ClassDef パラメータ

パラメータ	説明	許容値
GUID	コンポーネントを表すグローバルに固有な識別子	有効な GUID。たとえば、 {019348e1-3cf3-11d194f9-0060974036d0}
GUID/1/EntityDescriptor	エンティティ Beans 記述子用のプール設定に関連するプロパティを含む	
pool-manager/free-pool-maxsize	エン트리数で示すインスタンスの未使用プールの最大サイズ	デフォルトは 1
	値が 0 に設定されると、CCSO/EB/EBObjFreePoolMax の値が使用される	デフォルトは 0
pool-manager/ready-pool-maxsize	エン트리数で示すレディーキャッシュの最大サイズ。コミットオプション B とともに使用される	デフォルトは 0 (無限)
pool-manager/ready-pool-timeout	コンテナに使用されるレディープールのタイムアウト	
	コミットオプション B とともに使用される	

表 3 レジストリの ClassDef パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
GUID/GDS	コンポーネントが分散されるサーバの場所 (ホスト IP アドレスと KXS ポート番号)	<p>1 つ以上のホスト IP アドレスとポート番号のリスト。</p> <p>例</p> <p>126.129.8.120:10818 126.129.8.124:10818</p> <p>127.0.0.1 という IP アドレスは、コンポーネントが分散されず、別のサーバとのロードバランスなしで、ローカルで実行されることを表す</p> <p>リストの各メンバーには、次の 1 つ以上のフラグ (次の 1 つ以上のフラグの論理和) で構成される値が関連付けられている</p> <p>ENABLED - 0x00000001 (コンポーネントを有効にする)</p> <p>ENCRYPT - 0x00000002 (コンポーネントパラメータが Web サーバと iPlanet Application Server 間で暗号化される)</p> <p>STICKYLB - 0x80000000 (コンポーネントはスティッキー)</p> <p>コンポーネントが有効になっていてスティッキーの場合、値は次のとおり : -2147483647</p> <p>コンポーネントが暗号化されてスティッキーの場合、値は次のとおり : -2147483646</p> <p>コンポーネントが有効で暗号化されており、スティッキーの場合、値は次のとおり : -2147483645</p>

ClassImp パラメータ

ClassImp セクションには、ClassDef セクションと同様に、iPlanet Application Server で使う、登録されたすべてのコンポーネントが含まれています。このセクションに含まれるコンポーネントの属性は、ClassDef セクションの場合とは対照的にサーバに固有のものであり、複数の iPlanet Application Server 間で適用されるグローバル属性が含まれます。この節で説明するパラメータはすべて、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥ClassImp¥GUID #¥1.0

UNIX

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥ClassImp¥GUID #¥1.0

表 4 レジストリの ClassImp パラメータ

パラメータ	説明	許容値
100	コンポーネントの名前	文字列で表される有効なコンポーネント名 例 "AppLogic FindCust"
1000	コンポーネントのパッケージ情報を実装する Java クラスの名前	有効な Java パッケージの情報 例 "GXApp.OnlineBank.FindCust"
1100	コンポーネントが格納されている iPlanet Application Server ディレクトリのパス	有効なディレクトリパス 例 "GXApp¥OnlineBank¥FindCust.Class"
120	アプリケーションの名前	アプリケーション名 例 "OnlineBank"
300	コンポーネントに関連付けられた ACL	kreg を使ってコンポーネントの ACL を作成する
Type	コンポーネントのタイプ (Java、C++)	コンポーネントタイプ 1000 - Java コンポーネント 3000 - C++ コンポーネント

トップレベル (6.5) パラメータ

レジストリの 6.5 セクションの直下にあるパラメータには、iPlanet Application Server とアプリケーションディレクトリの情報が含まれています。

この節で説明するパラメータはすべて、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5

UNIX

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5

表 5 レジストリのトップレベル (6.5) のパラメータ

パラメータ	説明	許容値
AppPath	Application Server で登録されたアプリケーションのディレクトリパスを含む	例: c:¥iPlanet¥ias¥APPS
BasePath	インストールされている Application Server のディレクトリパスを含む	c:¥iPlanet¥ias
ModulesDirName	Application Server で登録されたアプリケーションモジュールを含むディレクトリ名。このディレクトリは AppPath パラメータで指定されたディレクトリ内に配置しなければならない	モジュール

管理パラメータ

レジストリの Admin セクションには、Application Server の管理パラメータが含まれています。これらの値のほとんどは、Administration Tool を使って設定できます。

この節で説明するパラメータはすべて、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥Admin

UNIX

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥Admin

表 6 レジストリの管理パラメータ

パラメータ	説明	許容値
AutoStart	エンジンのイベントがエラーになったとき、Application Server の AutoStart を有効または無効にする	0 (オフ) 1 (オン) デフォルトは 1
DisableEntWideAdminFromHere	現在のマシンからの Application Server の管理を有効または無効にする	0 (オフ) 1 (オン) デフォルトは 0
DisableSnmp (UNIX のみ)	SNMP を有効または無効にする	0 (オフ) 1 (オン) デフォルトは 1
EngineConnRetries	失敗した後、エンジンが再接続を試みる回数を指定する	デフォルトは 10
EngineMaxRestarts	最初に失敗した後、エンジンが再起動を試みる回数を指定する	デフォルトは 10
HeartbeatInterval	エンジンが接続され、動作しているかどうかを確認するためのチェックの間隔 (秒単位)	デフォルトは 10
Host	Application Server に割り当てられた IP アドレス	有効な IP アドレス
MailRecipients	イベントの管理通知を受け取る人の電子メールアドレス	電子メールアドレスの、セミコロンで区切られたリスト
MailServer	管理通知を発信するメールサーバ	有効な IP アドレスまたは電子メールサーバドメイン名

表 6 レジストリの管理パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
Notify KCS crashed	KCS エンジンがクラッシュしたとき、ログエントリの作成を有効または無効にする	0 (オフ) 1 (オン) デフォルトは 0
Notify KJS crashed	KJS エンジンがクラッシュしたとき、ログエントリの作成を有効または無効にする	0 (オフ) 1 (オン) デフォルトは 0
Notify KXS crashed	KXS エンジンがクラッシュしたとき、ログエントリの作成を有効または無効にする	0 (オフ) 1 (オン) デフォルトは 0
NotifyAbnormalClusterStatus	クラスタが異常な状態に達したとき、ログエントリの作成を有効または無効にする	0 (オフ) 1 (オン) デフォルトは 0
NotifyEngineMaxRestarts	iPlanet Application Server エンジンの再起動試行回数が最大数に達したとき、ログエントリの作成を有効または無効にする	0 (オフ) 1 (オン) デフォルトは 0
Port	アプリケーションサーバに登録されたポート番号	ポート番号。デフォルトのポート番号は 10817
RedirectLogBaseDir	バックアップディレクトリへの記録をリダイレクトするパスを指定する	有効なディレクトリパス名
Script	管理通知が認可されると実行するスクリプト	スクリプト名が指定されているディレクトリパス pageme.csh または notify.bat
ServerStopTimeout	Application Server がシャットダウンする前のアイドル時間	デフォルトは 60
recvdir	この値はアプリケーションサーバでは使われない。将来の開発のために予約されている	デフォルトでは値なし

クラスタパラメータ

クラスタ管理は、レジストリの Clusters セクションと CCS0 セクションにある、クラスタに関連するいくつかのパラメータを使って処理されます。

これらの値は、Administration Tool の「一般」画面の「クラスタ」タブで変更できます。インストールする前にクラスタを計画し、インストール後にクラスタを作成できるようにすることをお勧めします。

注 クラスタ情報を変更した後は、クラスタを再起動して新しい設定を有効にする必要があります。

Clusters セクション

Clusters セクションには、ネットワーク上に作成したすべてのクラスタと各クラスタ内のすべてのサーバなどが一覧表示されます。レジストリ内のリストにサーバの IP アドレスを追加することによって、クラスタにサーバを追加できます。Administration Tool を使うこともできます。

Clusters パラメータは、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥Clusters

UNIX

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥Clusters

表 7 レジストリの Clusters パラメータ

パラメータ	説明	許容値
クラスタ名 ¥MaxBackups	クラスタ内の Sync Backup の最大数	0 - Sync Backup なし 1 - 1 個の Sync Backup n - n 個の Sync Backup 上限はクラスタ内のマシンの最大数より 1 少ない値
クラスタ名 ¥MaxHops	使われていない	
クラスタ名 ¥MaxSyncHeartBeat	ハートビートメッセージ数がこの最大値を超えた場合、ほかのエンジンへのハートビートメッセージの送信を停止する	秒数。デフォルトは 10

表7 レジストリの Clusters パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
クラスタ名 ¥SyncHeartBeatInterval	ハートビートメッセージがサーバ間で送信される間隔	秒数。デフォルトは 30
クラスタ名 ¥SyncTimerInterval	削除されたノードがガベージコレクションされる間隔	秒数。デフォルトは 60
クラスタ名 ¥SyncServers	クラスタ内のデータ同期サーバ	有効な IP アドレス、ポート番号、および優先度のリスト
	このフォルダには、クラスタ内の各サーバで同じ情報を格納する必要がある。クラスタ内の各サーバで同じ LDAP サーバを共有していない場合は、クラスタが正常に動作していないときにすべてのサーバでこのフォルダの不整合をチェックする	例 192.168.1.61:10502=1 192.168.1.61:10802=2
クラスタ名 ¥SyncPersChunkSz	使われていない	
クラスタ名 ¥AutoRestartServerForSplitPrimaries	このキーが 1 に設定されていて、分割プライマリが検出された場合は、優先度の低い Application Server インスタンスが再起動される	0 または 1。デフォルトは 0

メッセージ駆動の Bean パラメータ

メッセージ駆動型の Bean を配置すると、SOFTWARE/iPlanet/Application Server にある iPlanet レジストリ内に新しいキーが作成されます。MDBDef というこのキーは、iPlanet Application Server に配置されたすべてのメッセージ駆動型の Bean の親キーになります。

追加のメッセージ駆動型の Bean が配置されると、各メッセージ駆動型の Bean のパラメータが MDBDef キーに作成されます。各メッセージ駆動型の Bean に属する値は、Bean の配置記述子に指定した値です。

CCS0 セクション

レジストリの CCS0 (Current Control Set Zero) セクション内のクラスタに関連するパラメータを使うと、シンクロナイザをクラスタにマップすることができます。各シンクロナイザの ClusterName キーをクラスタ名にマップします。クラスタ名が設定されている場合、シンクロナイザはそのクラスタのサーバと通信します。クラスタ内のサーバは、Cluster セクションの表で説明したクラスタ名 ¥SyncServers パラメータの下に一覧表示されます。

シンクロナイザパラメータは、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0

UNIX

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0

表 8 レジストリの CCS0 クラスタに関連するパラメータ

パラメータ	説明	許容値
ClusterName¥default	<p>関係するすべてのデータシンクロナイザがマップされるデフォルトのクラスタ。これらのサーバはすべて Default クラスタの下だけの一覧表示されるので、クラスタのほかのサーバをすべて一覧表示するには、各サーバマシンのレジストリを更新する必要があります</p> <p>このキーにはネットワーク上の各クラスタの値が含まれる。値の名前はクラスタ名である</p>	<p>必要に応じて、default をシンクロナイザが接続するクラスタ名に変更する</p> <p>インストール時にクラスタを指定しない場合、デフォルトでは machine_name-NoDsync というクラスタが作成される</p>

CGI パラメータ

レジストリの CGI パラメータは、iPlanet Application Server バージョン 4.x および 6.x ではサポートされていません。

この節の変数はすべて、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

```
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥CGI¥INPUTVARS
```

UNIX

```
SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥CGI¥INPUTVARS
```

CONN パラメータ

レジストリのこのセクションには、Web コネクタプラグインに関する情報が含まれています。

この節で説明するパラメータはすべて、次の領域で使用できます。

Windows NT

```
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥CONN
```

UNIX

```
¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥CONN
```

表 9 レジストリの CCS0¥CONN パラメータ

パラメータ	説明	許容値
Host	プライマリ Application Server のホスト IP アドレス	有効な IP アドレスサーバクラスタを作成する必要がある
PingTimeout	UDP ping タイムアウト	秒数。通常のは 5。デフォルトは 3
PingRetries	UDP Ping の再試行回数	デフォルトは 1
RecvTimeout	ソケットの受信タイムアウト	秒数。デフォルトは 10

表 9 レジストリの CCS0YCONN パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
DisableEcho	1 に設定されている場合は、 接続のチェックを無効にする 0 に設定されている場合は、 プラグインは KXS にリクエストを送信する前に UDP Ping を送信することによって KXS が動作しているかどうかを確認する	0 または 1 配置サイトのセキュリティ管理者が Web サーバと KXS 間の UDP トラフィックを低下させる場合は、このキーを 1 に設定する
DebugLevel	接続ログのデバッグレベルを設定する。デフォルトでは、このキーは存在しない	1 の場合、新しい接続と接続クローズの情報を記録する 2 および 3 の場合、アクティビティについての情報を記録し、クラスタ内のほかのマシンが稼働しているかどうかをチェックする 4 の場合、送受信されるすべてのパケットについての情報を記録する。これは最大値

データベースパラメータ

iPlanet Application Server レジストリには、データベース設定に影響するいくつかのパラメータが含まれています。新しいデータベースクライアントをセットアップすると、レジストリからドライバ設定とデータベース接続を操作できます。

Administration Tool の「データベース」画面には、レジストリのこれらのセクションへのインターフェースが用意されています。Administration Tool を使って、データベースの優先度の変更、クライアントライブラリの場所の変更、ログ記録の有効化、およびデータベース接続プールを設定を行えます。レジストリを手動で編集して、デバッグパラメータの変更、あるいはデータベースの問題を分析するためにデバッグメッセージの追加ログの有効化を行うこともできます。

レジストリの次の領域は、データベース設定の問題に関連しています。

- DataSources
- Drivers
- 特定のデータベースドライバ設定パラメータ

POOLS 領域もデータベース設定に影響します。57 ページの「コンポーネントリクエストマネージャとパスパラメータ」を参照してください。

この節で説明するパラメータはすべて、レジストリの次の領域で使用できます。DAE セクションは、新しい iPlanet Application Server バージョン 6.5 アプリケーションでは使われません。

Windows NT

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\DAE
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\DAE2
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\DAE3
```

UNIX

```
\SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\DAE
\SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\DAE2
\SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\DAE3
```

DataSources

DataSources では、データソース名を特定のドライバにマッピングします。データソースのユーザ定義の論理名は、データソースへのコネクションを開くためにコンポーネントで使われます。各データソースには、使うドライバを指定する固有のレジストリパラメータがあります。ドライバを表す次の文字列値のいずれかをデータソースに適用できます。

- "INFORMIX_CLI"
- "ORACLE_OCI"
- "DB2_CLI"
- "SYBASE_CTLIB"
- "ODBC"

次のパラメータは、データベースへのサーバイベントのログを制御します。これらのパラメータは、Administration Tool の「ログ」ページの「サーバイベント」タブで設定できます。

表 10 レジストリの CCS0¥DataSources パラメータ

パラメータ	説明	許容値
DataSources¥eventlog	Application Server のイベントログのデータソースマッピング	登録されているデータベースドライバのタイプ たとえば、Oracle の ORACLE_OCI、Informix の INFORMIX_CLI
DataSources¥httplog	Web サーバの HTTP ログのデータソースマッピング	登録されているデータベースドライバのタイプ たとえば、Oracle の ORACLE_OCI、Informix の INFORMIX_CLI
DataSources¥ksample	ログ情報が送信されるデータベーステーブルのデータソースマッピング	登録されているデータベースドライバのタイプ たとえば、Oracle の ORACLE_OCI、Informix の INFORMIX_CLI

Drivers

各ドライバには定数フラグの数値があります。

- GX_DA_DRIVER_ODBC = 1
- GX_DA_DRIVER_ORACLE_OCI = 16
- GX_DA_DRIVER_SYBASE_CTLIB = 32
- GX_DA_DRIVER_INFORMIX_CLI = 128
- GX_DA_DRIVER_DB2_CLI = 256
- GX_DA_DRIVER_MICROSOFT_SQL = 64
- GX_DA_DRIVER_DEFAULT = 32769
- GX_DA_DRIVER_ANY = 2147483647

GX_DA_DRIVER_DEFAULT はデータソース内で一致するものを検索します。完全に一致するものが見つからない場合は、データベースの優先度に従って各データソースに対して検索を行います。また、GX_DA_DRIVER_ANY が使われる場合、データベースコネクションを試みるように設定されているすべてのドライバが、データベースの優先度の順に、一致しているかどうかを評価されます。

DRIVERS パラメータの下にある次のレジストリパラメータが、各フラグ番号に関連付けられます。

- ENABLE はドライバを有効にする (1) か、無効にする (0) かを指定する
- GUID (グローバルに固有な識別子) は固有の番号。この番号は変更してはならない。これは、データベースベンダーのドライバモジュールの上で動作する iPlanet Application Server のドライバモジュールをマップする
- LIBRARY はクライアントライブラリの DLL ファイル名。これは、db2cli.dll など、データベースベンダーのファイル名。これを変更するのは、ベンダーから受け取った更新ファイルの名前が変わっている場合のみ
- NAME はコンソールログメッセージに使われる。これは、データアクセスドライバ (DAD) コードからのエラーメッセージとともに表示される接頭辞。この値をドライブ名に設定する必要がある。したがって、たとえば、DB2 ドライバの値は DB2_CLI になる
- PRIORITY はデータベース接続の優先度番号。iPlanet Application Server をインストールするときに、インストールするデータベースのコネクションの優先度を指定するように促される。最高の優先度は 99、最低は 0。これは、システムにインストールされているデータベースにアプリケーションが接続を試みる順序を決めるために使われる優先度。データソースにドライバを指定しない場合は、Default ドライバのフラグ引数が使われる。これが指定されていない場合は、データベース接続の優先度番号によって、使われるデータベースクライアントが決まる

ドライバ固有のレジストリパラメータ

次のドライバがレジストリに一覧表示されます。

- DB2_CLI
- INFORMIX_CLI
- ODBC
- ORACLE_CLI
- SYBASE_CTLIB

各ドライバには次のパラメータがあります。

表 11 レジストリの CCS0¥DAE と DAE2 ドライバに固有のレジストリパラメータ

パラメータ	説明	許容値
LogicalNull	LogicalNull が 1 に設定されている場合は、値 0 が NULL 値として表示される	0 - 無効 1 - 有効
DAE2¥IS3PJDBC	このパラメータが有効になっている場合、ドライバはサードパーティのデータベースドライバである	0 - 無効 1 - 有効

表 11 レジストリの CCS0#DAE と DAE2 ドライバに固有のレジストリパラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
CacheCleanInterval	データベース接続のキャッシュ解除スレッドの実行間隔	0 より大きい秒数。デフォルトは 120
CacheConnTimeOut	接続がキャッシュから破棄されたあとのアイドル時間	0 より大きい秒数。デフォルトは 120
CacheDebugMsgs	データベースアクセスエンジン (DAE) がサポートされる各ドライバ (ODBC、DB2_CLI、INFORMIX_CLI、ORACLE_OCI、および SYBASE_CTLIB) のデバッグログメッセージを出力できるようにする デバッグメッセージの末尾にある括弧付きの番号は、メッセージが適用される接続番号	0 - デバッグを無効にする (デフォルト) 1 - デバッグを有効にする
CacheFreeSlots	指定した時間にキャッシュできる接続の最大数 (使用されるものも使用されないものも含む)	0 以上の値。デフォルトは 16
CacheInitSlots	CacheFreeSlots と同じ値に設定する。廃止の予定	0 より大きい値。デフォルトは 64
CacheMaxConn	データソースで一度に許容される接続の最大数	0 より大きい値。デフォルトは 64
ConnBackOffFactor	使われていない	
ConnGiveUpTime	データベースコレクションの作成に許容される時間。許容時間を超えた場合、接続試行は中止され、エラーが返される	0 より大きい秒数。デフォルトは 60
RMThreadMax	DAE の非同期照会リクエストマネージャに割り当てられるスレッドの最大数	0 より大きい値。デフォルトは 32
RMThreadMin	DAE の非同期照会リクエストマネージャに割り当てられるスレッドの最小数。この最小数は iPlanet Application Server によってあらかじめ割り当てられている	0 より大きい値。デフォルトは 0
RSBufferInitRows	1 つの照会 (1 つの ResultSet fetchNext () 操作) でデータベースからフェッチされる行数	0 より大きい値。デフォルトは 25

表 11 レジストリの CCS0¥DAE と DAE2 ドライバに固有のレジストリパラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
RSBufferMaxRows	ResultSet のバッファがアクティブな場合のバッファする行の最大数。バッファのサイズは RSBufferMaxSize バイトを超えてはならない。ResultSet バッファがいっぱいになると、バッファが無効になり、これを示すステータスが fetchNext () メソッドによって返される (1 つの KJS/KCS エンジンに適用される)	0 より大きい値。デフォルトは 100
RSBufferMaxSize	ResultSet のバッファがアクティブな場合のバッファする最大サイズ。バッファに含めることができるのは RSBufferMaxRows 行だけである。ResultSet バッファがいっぱいになると、バッファが無効になり、これを示すステータスが fetchNext () メソッドによって返される (1 つの KJS/KCS エンジンに適用される)	0 より大きいバイト数。デフォルトは 32768
SQLDebugMsgs	iPlanet Application Server コンソールで実行されるすべての SQL ステートメントを出力できるようにする	0 - SQL ステートメントの出力を無効にする 1 - SQL ステートメントの出力を有効にする

DAE3

DAE3 キーには、サードパーティ JDBC ドライバに関連付けられたパラメータが含まれています。アプリケーションサーバで使うサードパーティ JDBC ドライバは最大で 3 つ設定できます。DAE および DAE2 のドライバ名とは異なり、ドライバに固有の名前を指定できます。各ドライバキーには、次の値が含まれています。

表 12 レジストリの CCS0¥DAE3 パラメータ

パラメータ	説明	許容値
3PNativeDrvDir	タイプ 2 の場合、ネイティブデータベースドライバの場所を含む	有効なディレクトリの場所。たとえば、Oracle の場合は \$ORACLE_HOME¥lib

表 12 レジストリの CCS0¥DAE3 パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
Classname	ドライバのクラス名	たとえば、Oracle ドライバの値は次のようになる oracle.jdbc.pool.OracleConnectionPoolDataSource
XAClassname	ドライバのグローバルトランザクションのクラス名	たとえば、Oracle ドライバの値は次のようになる oracle.jdbc.xa.client.OracleConnectionXADataSource
classpath	ドライバのライブラリへのクラスパスのセミコロンで区切られたリスト	有効なクラスパス。たとえば、 D:¥Oracle¥Ora81¥jdbc¥lib¥classes.zip; D:¥Oracle¥Ora81¥jdbc¥lib¥nls_charset12.zip

EB パラメータ

レジストリの EB セクションには、アプリケーションサーバで Enterprise JavaBeans の管理を制御するパラメータが含まれています。iPlanet Application Server Administration Tool の「EJB」タブを使って、これらの値を変更することができます。

この節で説明するパラメータは、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥EB

UNIX

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥EB

表 13 レジストリの CCS0¥EB パラメータ

パラメータ	説明	許容値
DefaultFoSaveInterval	<p>EJB ステートを保存する頻度。サーバが失敗した場合、最後に保存された EJB のステートが復元される</p> <p>保存されたデータはクラスタ内にあるすべてのエンジンからアクセスできる。この値はサーバごとに設定され、有効なフェールオーバーオプションで配置された EJB に適用される。フェールオーバーオプションは Deployment Tool EJB 記述子エディタの「一般」タブで有効化する</p>	デフォルトは 10 秒
DefaultPassivationTimeout	現在メモリにある EJB のステートがディスクに書き込まれるまでの経過時間。この値はセッションタイムアウトより短くする必要はある	デフォルトは 60 秒
DefaultSessionTimeout	指定した時間内に EJB へのアクセスがないと、EJB は削除される。ステートフルセッション EJB に適用される	デフォルトは 14400 秒
DefaultTransportTimeout	フェールオーバーが有効になっている場合、Dsync に格納される Beans のタイムアウト。この時間を過ぎると、Beans は Dsync から削除される。フェールオーバーでない (ファイル) ストレージには使われない	デフォルトは 60 秒
EbInterval	EJB プールが EJB を不活性化または削除する必要があるかどうかをチェックする間隔	デフォルトは 10 秒

表 13 レジストリの CCS0¥EB パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
EbObjFreePoolMax	ias-ejb-jar.xml 記述子の <free-pool-maxsize> エントリに対応する空き Beans のプールのサイズ。アクセスされたすべてのエンティティ Beans は、将来の使用に備えて空きプールに入れられるが、再利用はされない	デフォルトは 20
EbObjPoolMax	ビジー状態のプールに一度に入ることができる Beans オブジェクトの最大数	デフォルトは 1000000
ImplFreePoolMax	EJB の数以内の最大キャッシュサイズ	デフォルトは 10 EJB
ImplPoolMax	ビジー状態のプールに一度に入ることができる Beans 実装オブジェクトの最大数。 EbObjPoolMax と同じ値に設定される	デフォルトは 1000000
MaxMetaMgrCacheSize	EJB のメタデータのキャッシュを参照。値は EJB の数以内	デフォルトは 30

EJB-Components パラメータ

レジストリの EJB-Components パラメータのセクションには、アプリケーションサーバに配置される EJB アプリケーションとそれに関連付けられた GUID が一覧表示されます。GUID の値を変更することはお勧めできません。iasdeploy removeapp コマンドを使って ELB コンポーネントをアンインストールし、コンポーネントを再配置して、新しい GUID を作成します。レジストリの使用中は、Boot¥BootStrapBean パラメータも変更しないでください。

EJB-Components キーは、レジストリの次の領域にあります。

Windows

```
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥EJB-Components
```

UNIX

```
Software¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥EJB-Components
```


エンジンパラメータ

エンジンパラメータは、さまざまな iPlanet Application Server エンジンのランタイムモデルを定義します。エンジンパラメータを使って、Executive (KXS)、Java (KJS)、および C++ (KCS) の各サーバプロセスを設定します。

この節で説明するパラメータはすべて、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥ENG

UNIX

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥ENG

表 14 レジストリの CCS0¥Eng パラメータ

パラメータ	説明	許容値
ID	メイン実行エンジンの ID	デフォルトは 0。この値は変更しないこと
Key	プロダクトキー。iPlanet Application Server のインストール時に、このキーを入力する。インストール中に間違った情報を入力した場合や、評価用サーバをすべての機能を備えた運用サーバに変換する場合は、このパラメータをリセットする	プロダクトキーは、製品に同梱されているウェルカムレターに記載されている
Main	エンジン番号 ¥Host で参照されるメイン Executive Server (KXS) エンジンを識別する (次を参照)	このインストールの Executive Server 数。デフォルト値は 0
MaxEngines	Executive Server (KXS) がサービスを提供するエンジンの最大数	設定しているエンジンの数より大きい値。デフォルト値は 32
エンジン番号 ¥Disable	指定した KXS、KJS、または KCS エンジンを無効にする。テストシナリオを分離するとき、エンジンを無効にする。一般的なサーバの障害 (たとえば、リクエストを完了できない場合) を解決するには、1 つの KJS と KCS 以外のエンジンを無効にする	0 - 指定したエンジンを有効にする 1 - 指定したエンジンを無効にする

表 14 レジストリの CCS0¥Eng パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
エンジン番号 ¥ EngineStopTimeout	エンジンが停止するまでに許容されるタイムアウト時間	デフォルトは 60
エンジン番号 ¥Host	指定したエンジンを実行しているマシンのホスト名	KXS エンジンが稼働しているホストの IP アドレス。 NT では、エンジンがローカルサーバで稼働している場合、このエントリが 127.0.0.1 になる可能性がある
エンジン番号 ¥ID	指定したエンジンのタイプ	0 - Executive Server (KXS) 1000 - Java サーバ (KJS) 3000 - C++ サーバ (KCS)
エンジン番号 ¥Name	指定したエンジンの名前	"Main Engine" "C++ Engine" "Java Engine"
エンジン番号 ¥Port	指定したエンジンの TCP/IP ポート番号。ポート番号はすべて固有でなくてはならない	有効な固有のポート番号 (NT) デフォルト値は KXS - 11000 KJS - 11001 KCS - 11002
エンジン番号 ¥EB	このレジストリセクションを使って、特定のエンジンの CCS0¥EB レジストリセクションに設定されている Enterprise JavaBeans パラメータをオーバーライドする。このセクションが空の場合、エンジンは CCS0¥EB レジストリセクションに設定されているデフォルト値を使う	レジストリの CCS0¥EB セクションにあるキーをコピーし、その値をリセットする
エンジン番号 ¥REQ	このレジストリセクションを使って、特定のエンジンの CCS0¥REQ レジストリセクションに設定されている Request Manager パラメータをオーバーライドする。このセクションが空の場合、エンジンは CCS0¥REQ レジストリセクションに設定されているデフォルト値を使う	レジストリの CCS0¥REQ セクションにあるキーをコピーし、その値をリセットする

表 14 レジストリの CCS0¥Eng パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
エンジン番号 ¥TXNMGR	このレジストリセクションを使って、特定のエンジンの CCS0¥TXNMGR レジストリセクションに設定されている。Transaction Manager パラメータをオーバーライドする。このセクションが空の場合、エンジンは CCS0¥TXNMGR レジストリセクションに設定されているデフォルト値を使う	レジストリの CCS0¥TXNMGR セクションにあるキーをコピーし、その値をリセットする

EVENTS パラメータ

レジストリの EVENTS セクションには、以前のバージョンの iPlanet Application Server で登録されたアプリケーションイベントが含まれています。Release 6 以降の Application Server で登録されたアプリケーションイベントはすべて、レジストリの EVENTS2 セクションに表示されます。

Windows NT

```
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥EVENTS
```

UNIX

```
¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥EVENTS
```

EVENTS2 パラメータ

レジストリの EVENTS2 セクションには、AppLogics を介して格納されたアプリケーションイベントが含まれています。開発者は iPlanet Application Server API を使って、イベントを作成してスケジュールを管理することや、イベントを起動するトリガを作成することができます。これらのイベントは、イベントのステータスのオンまたはオフを表す値とともにレジストリに格納されます。管理者は EVENTS2 パラメータを変更しないでください。SessionInvalidator サブキーの値を変更しないでください。

この節で説明するパラメータはすべて、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

```
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥EVENTS2
```

UNIX

```
¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥EVENTS2
```

表 15 レジストリの CCS0¥EVENTS2 パラメータ

パラメータ	説明	許容値
Scheduler¥ActionCount	特定のアプリケーションイベントのアクションの合計数を指定する	0 より大きい数。値 1 はアクションが 1 つのアプリケーションイベントを示し、値 4 は 4 つのアクションを含むアプリケーションイベントを示す
Scheduler¥Enable	アプリケーションイベントを有効または無効にする	0 の場合はオフ 1 の場合はオン デフォルト値は 1
Scheduler¥Time	アプリケーションイベントの後続のアクションが処理される間隔を指定する	次に示すように、Time イベントは 1 行で指定される 10 秒間隔の場合は *:0,10,20,30,40,50:0 */*/ 2 秒間隔の場合は *:0,2,4,6,8,10,12,14,16,18,20,22,24,26,28,30,32,34,36,38,40,42,44,46,48,50,52,54,56,58:0 */*/
Scheduler¥Action_number¥Sequence	アプリケーションイベントの順序内でアクションが実行される場所を指定する番号	アプリケーションイベントシーケンスの最初のアクションの場合、この値は 1 アプリケーションイベントシーケンスの 4 番目のアクションの場合、この値は 4

表 15 レジストリの CCS0¥EVENTS2 パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
Scheduler¥ Action_number¥ Action_type	シーケンス内のアクションのタイプを定義する	これは、プロセスマネージャアプリケーションの次のメソッドのような、Servlet に対するリクエストの場合もある ServletReq=pae/Engine.npm?ias_request_appname=pae&ias_request_servletname=Engine.npm&eventId=Engine.npm&eventId=OnPerformScheduledEvent&REQUEST_METHOD=GET メールアクションのように、このセクションに複数のアクションキーを含めることもできる MailFile=/u/rchinta/appev.mail SenderAddr=rchinta MailHost=nsmail-2 ToList=rchinta

次の例では、登録された 2 つのアプリケーションイベントを示します。1 番目のアプリケーションイベントには、4 つのアクション (1 つの Servlet、1 つのメール、2 つのアプリケーションロジックリクエスト) が含まれています。2 番目のアプリケーションイベントには、1 つのアクション (アプリケーションロジックリクエスト) だけがあります。各アプリケーションイベントは EVENTS2 の下に名前ごとに一覧表示されます。イベントの下にある値はその属性に対応し、イベントの下にある各サブキーはそのイベントのアクションに対応します。

EVENTS2

```
- tstEv1
  Enable=1
  Time=*:0,10,20,30,40,50:0 */**
  ActionCount=4
- 1
  Sequence=1
  NewReq=GUIDGX-{754CE8F7-8B7A-153F-C38B-0800207B8777}
- 2
  Sequence=2
  ServletReq>HelloWorldServlet?arg1=val1&argu2=valu2
- 3
  Sequence=3
```

```

MailFile=/u/rchinta/appev.mail
SenderAddr=rchinta
MailHost=nsmail-2
ToList=rchinta
- 4
Sequence=4
NewReq=GUIDGX-{754CE8F7-8B7A-153F-C38B-0800207B8777}
- tstEv2
Enable=1
Time=*:8:0 */*/*
ActionCount=1
- 1
Sequence=1
NewReq=GUIDGX-{754CE8F7-8B7A-153F-C38B-0800207B8777}?p1=hello0

```

エクステンションパラメータ

Extensions キーには、アプリケーションサーバがインストールされているエクステンションを検索し、読み込みの優先度を判断するための情報が含まれています。

表 16 レジストリの CCS0¥Extensions パラメータ

パラメータ	説明	許容値
NUM_LOAD_PROIORITIES	インストールされているエクステンションの読み込みの優先度の範囲。値 0 は値 5 よりも読み込みの優先度が高い	デフォルト値は 5。変更しないこと
<i>Extension_name</i> ¥ENABLED	エクステンションを有効または無効にする	1 の場合はオン (デフォルト) 0 の場合はオフ
<i>Extension_name</i> ¥GUID	エクステンションの GUID	この値は変更しないこと
<i>Extension_name</i> ¥LOADPRIORITY	エクステンションの読み込みの優先度を指定する	値の範囲は 0 ~ 5 0 は最高の優先度で、5 は最低の優先度
<i>Extension_name</i> ¥CONTEXT_NAMES¥ <i>EXTENSION_NAME</i>	エクステンションにアクセスするためにアプリケーションで内部的に使われる名前	この値は変更しないこと
<i>Extension_name</i> ¥ENGINES	エクステンションが登録されるエンジン	1000 = Java エンジン 3000 = C+ エンジン

HTTPAPI パラメータ

HTTPAPI パラメータには、Web コネクタプラグインが iPlanet Application Server と通信するための情報が含まれています。通常、これらの変数は、iPlanet Application Server インストールプログラムと Web コネクタプラグインによって適切な値に設定されます。ただし、いずれかを変更する必要がある場合は、変更を行う前に次の表を参照してください。

注	<p>Web Connector DebugMode キーは、Web コネクタプラグインのエラーログにダンプされる情報の量を決めます。情報の保存先を指定する環境変数 IAS_PLUGIN_LOG_FILE を設定できます。</p> <p>通常、管理者はレジストリを変更した後で iPlanet Application Server を再起動します。この場合、Web サーバは再起動する必要がありますが、Application Server は再起動する必要はないことに注意してください。</p>
----------	---

このパラメータには、Administration Tool のインタフェースがありません。このパラメータを変更するには、kregedit を使います。

この節の変数はすべて、次のパラメータで使用できます。

Windows NT

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥HTTPAPI

UNIX

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥HTTPAPI

表 17 レジストリの CCS0¥HTTPAPI パラメータ

パラメータ	説明	許容値
AgentToken	Web コネクタプラグインがリクエストを受け取ったとき、そのリクエストの URL にこのパラメータで定義されたサブ文字列が含まれる場合、そのリクエストはプラグインモードではなく CGI モードで実行される。このパラメータは、CGI リクエストとして実行する必要があるコンポーネントを定義するために使う	URL のキーとして使われる長さ 80 の任意の ASCII 値。デフォルト値は KXXX

表 17 レジストリの CCS0¥HTTPAPI パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
DebugMode	Web コネクタの場合、ログにより多くの情報を送信するために設定するパラメータは 1 つだけである。この情報は、管理者が iPlanet Application Server と Web コネクタの対話を表示するときに役立つ。これを使って、問題の原因が iPlanet Application Server にあるか、Web コネクタにあるかを区別する	0 ~ 5: レベルに従って、デバッグメッセージを表示する。最高レベルの 5 では、すべてのメッセージを表示する。デフォルトは 0
EnableStats	統計を有効または無効にする	1 統計を有効にする 0 統計を無効にする (デフォルト)
ExtraBufferSize	バッファのサイズを定義する。HTTP Header 変数の追加バッファ領域を設定するために使われることもある	バイト数。バッファサイズの計算は内部的に実行され、必要なバッファサイズが適切に割り当てられるため、通常は 0
GXIP	プラグインで iPlanet Application Server の検索に使う IP アドレス。最初にこの値を使って、Web コネクタプラグインの設定に関連した問題を解決する	有効な IP アドレス。デフォルトは 127.0.0.1
GXPortNum	KXS プロセスを検索してリクエストを送信するためにプラグインで使われる TCP/IP ポート番号	有効なポート番号。デフォルトは 10818
HTTPPort	サポート中止	
ListenPort	Web コネクタプラグインのリスナポート。別のプロセスと競合しないかぎり、このポート番号は変更しないこと	現在は使われていないため、デフォルト値を変更しないこと
MaxConn	KXS エンジンに対して開かれる接続オブジェクトの最大数	デフォルトは 1

表 17 レジストリの CCS0¥HTTPAPI パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
NASRespTime	<p>1 に設定すると、Application Server でリクエストの実行に必要な応答時間をミリ秒単位で記録する。この統計は Web サーバのエラーログファイルに表示される。 DebugMode を有効にする必要はない</p> <p>NASRespTime 時間には次の手順が含まれる</p> <ul style="list-style-type: none"> • 必要に応じて、ロードバランスを行う • リクエストを送信し、応答を待つ <p>PluginRespTime も参照</p>	0 または 1。デフォルトは 0
NoCookie	iPlanet Application Server に対して cookie を有効または無効にする。この値をオン (1) にすると、cookie が無効になり、iPlanet Application Server が隠し cookie モードになる (GXHC_)。運用システムでは (テストシステムの場合とは逆に)、このパラメータを 0 に設定する必要がある (cookie は無効にならない)	<p>0 - (デフォルト) cookie と隠しフィールドが、要求元の Web ブラウザに返される</p> <p>1 - 隠しフィールドだけが、要求元の Web ブラウザに返される</p> <p>2 - cookie だけが、要求元の Web ブラウザに返される</p>
NoRespPage	サーバがダウンしているとき、応答がリダイレクトされる URL	URL
PATH	Web サーバの docs ディレクトリの場所	有効なパス

表 17 レジストリの CCSOYHTTPAPI パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
PluginRespTime	<p>1 に設定すると、プラグインでリクエストの実行に必要な応答時間をミリ秒単位で記録する。この統計は Web サーバのエラーログファイルに表示される。DebugMode を有効にする必要はない</p> <p>PluginRespTime 時間には次の手順が含まれる</p> <ul style="list-style-type: none"> • URL から情報を抽出する (アプリケーション名、Servlet 名、コンテキストパスなど) • Application Server に送信するメッセージを準備する • 必要に応じて、ロードバランスを行う • リクエストを送信し、応答を待つ • 必要に応じて、応答の URL を書き直す • クライアントへの応答のストリーミングを行う <p>NASRespTime も参照</p>	0 または 1。デフォルトは 0
PostDataToken	送信される生ポストデータのヘッダー名。これは、SendRawPostData=TRUE の場合にだけ読み取られる	デフォルトは HTTP_POST_BODY
RegReadInterval	ダイナミック再読み込みがオンになっている場合のレジストリの再読み込みの間隔。ダイナミック再読み込みを使うと、iPlanet Application Server または Web サーバを再起動することなく、アプリケーションの配置または再配置ができる。通常、レジストリは初期化時にだけ読み取られる	秒数。デフォルトは 120
RejectWhenBusy	どのような場合にリクエストが拒否されるかを指定する	この値は変更しないこと
RootPatternTrans	アプリケーション名へのコンテキストルートのマッピングを一覧表示する	
SSPL_APP_PREFIX	プラグインおよび Application Server で処理される URL リクエストを指定するために、Web サーバプラグインの NameTranslation 部分で使われるプレースホルダ	許容値: 空でない文字列 デフォルトは NASApp

表 17 レジストリの CCSOYHTTPAPI パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
SecUrlTrans	保護された URL およびそれらの URL に必要な認証タイプを一覧表示する	URL
SendRawPostData	cookie をサポートしないブラウザに対して、隠しフィールドや隠し cookie を埋め込まずに、プラグインで POST データをそのまま送信するかどうかを指定するために使う	FALSE (デフォルト) または TRUE
ServletPatternTrans	Servlet 名への Servlet マッピングを一覧表示する。インストール後、このキーにはサンプルアプリケーションおよびシステムアプリケーションのマッピングが含まれる	
INPUTAPACHE	Apache プログラミングインタフェースの共通 HTTP 変数を含む。Apache の Web サーバプラグインで使われる。* 詳細については、44 ページの表 18 を参照	これらのパラメータのデフォルト値は変更しないこと
INPUTISAPI	Microsoft の ISAPI (Internet Information Server Application Programming Interface) の共通 HTTP 変数を含む。IIS の Web サーバプラグインで使われる。* 詳細については、44 ページの表 18 を参照	これらのパラメータのデフォルト値は変更しないこと
INPUTNSAPI	NSAPI (iPlanet Web Server Application Programming Interface) の共通 HTTP 変数を含む。iPlanet Web Server で使われる。* 詳細については、44 ページの表 18 を参照	これらのパラメータのデフォルト値は変更しないこと

* 通常のインストールでは、Web コネクタプラグインによってすべての共通 HTTP 変数が自動的に収集され、コンポーネントに送信されるため、INPUTAPACHE、INPUTISAPI、および INPUTNSAPI の各パラメータは最初、空にする必要があります。次のリストには、自動的にコンポーネントに送信される HTTP 変数が含まれています。iPlanet Application Server インストールプログラムがこのリストに含まれているパラメータの下に変数を追加する場合は、その変数をレジストリから削除します。リストにない変数を使う場合は、INPUTAPACHE、INPUTISAPI、または INPUTNSAPI の各パラメータの下に追加します。

この 3 つのキーの下にあるエントリはすべて、プラグイン内のリストと比べて確認されます。新しいキーには、コードの変更が必要です。プラグイン内のリストは、表 18 のリストと同じです。

INPUTAPACHE、INPUTISAPI、および INPUTNSAPI の下にある各パラメータの値は、0 または 1 です。値 0 のキーは iPlanet Application Server に送信されません。

表 18 INPUTAPACHE、INPUTISAPI、および INPUTNSAPI パラメータ

AUTH_TYPE	AUTH_USER
CLIENT_CERT	CONTENT_LENGTH
CONTENT_TYPE	HOST
HTTP_ACCEPT	HTTP_ACCEPT_CHARSET
HTTP_ACCEPT_ENCODING	HTTP_ACCEPT_LANGUAGE
HTTP_AUTHORIZATION	HTTP_CONNECTION
HTTP_COOKIE	HTTP_HOST
HTTP_IF_MODIFIED_SINCE	HTTP_REFERER
HTTP_USER_AGENT	HTTP_USER_DEFINED
HTTPS	HTTPS_KEYSIZE
HTTPS_SECRETKEYSIZE	PATH_INFO
PATH_TRANSLATED	QUERY
QUERY_STRING	REMOTE_ADDR
REMOTE_HOST	REMOTE_IDENT
REMOTE_USER	REQUEST_METHOD
SCRIPT_NAME	SERVER_NAME
SERVER_PORT	SERVER_PROTOCOL
SERVER_SOFTWARE	URL

HTTPLOG パラメータ

レジストリのこのセクションには、iPlanet Application Server がインストールされているマシンの IP アドレス、KJS のリスナポート、および HTTPLOG ログエントリをトリガする入力変数が含まれています。Web サーバプラグインでは、このデータを使ってログ情報を送信します。

各入力変数 (INPUTVARS の下) はデータベースフィールドにマップされます。Web サーバリクエストの特定のコンポーネントのログを有効にするには、Web サーバリクエストが正しく記録されるように HTTP 変数を特定のデータベースフィールドにマップする必要があります。データベースフィールドに HTTP 変数をマップするには、Web サーバマシン上の Web コネクタプラグインを使います。Web サーバマシンと iPlanet Application Server は、同一マシンにインストールされていなくてもかまいません。

この節で説明するパラメータは、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

```
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥HTTPLOG
```

UNIX

```
¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥HTTPLOG
```

表 19 レジストリの CCS0¥HTTPLOG パラメータ

パラメータ	説明	許容値
Host	iPlanet Application Server の IP アドレス	有効な IP アドレス。デフォルトは 127.0.0.1
Port	KJS エンジンのポート	有効なポート番号。デフォルトは 10818

重要: これらの変数のデフォルト値は変更しないでください。

表 20 レジストリの CSS0¥HTTPLOG¥INPUTVARS パラメータ

AUTH_TYPE	AUTH_USER
CLIENT_CERT	CONTENT_LENGTH
CONTENT_TYPE	HOST
HTTP_ACCEPT	HTTP_ACCEPT_CHARSET
HTTP_ACCEPT_ENCODING	HTTP_ACCEPT_LANGUAGE

表 20 レジストリの CSS0¥HTTPLOG¥INPUTVARS パラメータ (続き)

HTTP_AUTHORIZATION	HTTP_CONNECTION
HTTP_HOST	HTTP_IF_MODIFIED_SINCE
HTTP_PRAGMA	HTTP_REFERER
HTTP_USER_AGENT	HTTP_USER_DEFINED
HTTPS	HTTPS_CIPHER
HTTPS_KEYSIZE	HTTPS_SECRETKEYSIZE
PATH_INFO	PATH_TRANSLATED
QUERY	QUERY_STRING
REMOTE_ADDR	REMOTE_HOST
REMOTE_IDENT	REMOTE_USER
REQUEST_METHOD	SCRIPT_NAME
SERVER_NAME	SERVER_PORT
SERVER_PROTOCOL	SERVER_SOFTWARE
SERVER_URL	URL

ロードバランスパラメータ

ロードバランスパラメータを使うと、すべての iPlanet Application Server でリクエストを処理する方法を制御できます。ロードバランスを有効にすると、ビジー状態のサーバが利用できるようになるのを待つ代わりに、利用可能なサーバで実行されるように特定のリクエストをリダイレクトすることができます。iPlanet Application Servers は、負荷の統計を定期的に更新し、クラスタ内のほかのサーバにブロードキャストします。ロードバランス要因に基づいて、リクエストはダイナミックにサーバに渡されます。

Administration Tool の「ロードバランス」画面には、レジストリのこのセクションへのインタフェースが用意されています。Administration Tool を使って、サーバのロードバランスや応答時間を設定することができます。サーバのロードバランスを使う場合、iPlanet Application Server がサーバのロードバランスのために評価する属性を設定できます。

管理者が手動でレジストリを編集して、ロードバランスのログを有効にすることもできます。これは、運用前の段階で容量計画を行う場合に特に役立ちます。

この節で説明するパラメータは、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥LOADB

UNIX

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥LOADB

表 21 レジストリの CCS0¥LOADB パラメータ

パラメータ	説明	許容値
Disable	1 に設定されている場合は、ロードバランスを無効にする	0 または 1。デフォルトは 0
ConnectRetry	再確立を試みる前に、ダウンしたコネクションをスレッドがスキップする回数	デフォルトは 1000。インストール値は 30
AgentBroadCastInterval	クラスタ内のサーバ間で送信される分散コンポーネントに関する情報の各ブロードキャスト間の時間 (秒単位)	ブロードキャスト間の経過時間を秒単位で表す値
AgentLoadFactors¥ AgentCached	コンポーネント実行パフォーマンスの計算における要因として、キャッシュされたコンポーネントの結果の (ほかの AgentLoadFactors に対する) 相対的な重要度。この数値はパーセントで指定される すべての AgentLoadFactors (AgentCached、AvgExecTime、Hits、LastExecTime、および ServerLoad) の合計は 100 パーセントになるか、または ResponseTime が 100 の場合は 0 にならない	0 以上 100 以下の数。デフォルトは 40。インストール値は 0 (0 <= x <= 100)
AgentLoadFactors¥ AvgExecTime	実行パフォーマンスの測定における平均コンポーネント実行時間の相対的な重要度。この数値はパーセントで指定される すべての AgentLoadFactors (AgentCached、AvgExecTime、Hits、LastExecTime、および ServerLoad) の合計は 100 パーセントになるか、または ResponseTime が 100 の場合は 0 にならない	0 以上 100 以下の数。デフォルトは 10。インストール値は 0 (0 <= x <= 100)

表 21 レジストリの CCS0¥LOADB パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
AgentLoadFactors¥ LastExecTime	コンポーネント実行パフォーマンスの計算におけるコンポーネントの最後の実行時間の相対的な重要度。この数値はパーセントで指定される	0 以上 100 以下の数。デフォルトは 5。インストール値は 0 (0 <= x <= 100)
AgentLoadFactors¥ ResponseTime	すべての AgentLoadFactors (AgentCached、AvgExecTime、Hits、LastExecTime、および ServerLoad) の合計は 100 パーセントになるか、または ResponseTime が 100 の場合は 0 にならない これが 100 に設定されている場合、ロードバランスには応答時間の統計だけを使う ResponseTime とほかの AgentLoadFactors (AgentCached、AvgExecTime、Hits、LastExecTime、および ServerLoad) は相互に排他的。ResponseTime が 100 でほかのすべてが 0 の場合、インストール後のロードバランス方式はエージェントごとの応答時間を基にする RoundRobin を有効にすると、このロードバランス方式よりも優先される	0 または 100。デフォルトは 0。インストール値は 100 (0 <= x <= 100)
AgentLoadFactors¥ ServerLoad	コンポーネント実行パフォーマンスの計算におけるサーバ負荷 (次に示すように、ServerLoadFactors を使って計算される) の相対的な重要度。この数値はパーセントで指定される すべての AgentLoadFactors (AgentCached、AvgExecTime、Hits、LastExecTime、および ServerLoad) の合計は 100 パーセントになるか、または ResponseTime が 100 の場合は 0 にならない	0 以上 100 以下の数。デフォルトは 40。インストール値は 0 (0 <= x <= 100)
AgentLoadFactors¥ ServLoadUpdateInteval	サーバ負荷情報の更新間隔。サーバ負荷の更新は、更新が実行されるまでに抽出したサーバ負荷データを適用する	時間 (秒単位)

表 21 レジストリの CCS0¥LOADB パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
AgentLoadFactors¥Hits	コンポーネント実行パフォーマンスの計算において iPlanet Application Server でコンポーネントが実行される回数の相対的な重要度。この数値はパーセントで指定される すべての AgentLoadFactors (AgentCached、AvgExecTime、Hits、LastExecTime、および ServerLoad) の合計は 100 パーセントになるか、または ResponseTime が 100 の場合は 0 にならない	0 以上 100 以下の数。デフォルトは 5。インストール値は 0 (0 <= x <= 100)
AgentMaxHop	ロードバランスの実行中に、サーバ間でコンポーネントが行うホップの最大数	0 以上の数 (値が 0 の場合、ロードバランスは行われない)
AgentsNoMonitorInterval	iPlanet Application Server に対して現在実行中のコンポーネントのサンプリング間隔 (秒単位)	コンポーネント監視セッション間の経過時間を秒単位で表す値
CPUPerfMonitorInterval	iPlanet Application Server の CPU 使用率のサンプリング間隔 (秒単位)	このマシンの CPU 使用率の監視間隔を秒単位で表す値
DSKOpMonitorInterval	この iPlanet Application Server インストールを実行しているマシンのディスク使用率のサンプリング間隔 (秒単位)	ディスク使用率の監視セッション間の経過時間を秒単位で表す値
LoadBDAemonInterval	ロードバランスに関連した監視アクティビティの試行間隔 (秒単位)。サーバは、LoadBDAemonInterval 秒ごとに、ServerLoadUpdateInterval、ServBroadcastInterval、AgentBroadcastInterval など、ほかの間隔に関連したアクティビティをチェックする すべてのロードバランス監視間隔がこの間隔の倍数に切り上げられることに注意	0 より大きい数 たとえば、値 5 は、ロードバランスに関連した監視アクティビティの試行間隔が 5 秒であることを表す

表 21 レジストリの CCS0YLOADB パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
Log	ロードバランサがエラーログに出力する情報の種類を指定する	<p>1 - サーバ間でリダイレクトされるすべてのコンポーネントリクエストを記録する (<i>log_redirect</i>)</p> <p>2 - サーバが収集および受信するすべてのサーバ負荷統計を記録する (<i>log_server_info</i>)</p> <p>4 - サーバが収集および受信するすべてのコンポーネント統計を記録する (<i>log_applogic_info</i>)</p> <p>値は、デバッグの詳細度レベルに応じた、OR 演算の対象にすることができるビット位置。たとえば、値 3 (1 2) は、リクエストのリダイレクトとホスト情報の組み合わせを示す</p>
McastAppStats	ロードバランスデータをマルチキャストするために KXS ベースのサーバサイドロードバランサで使われる	廃止。このキーの使用はお勧めできない
MemThrashMonitorInterval	iPlanet Application Server のメモリ使用率のサンプリング間隔 (秒単位)	メモリ使用率の監視セッション間の経過時間を秒単位で表す値
RoundRobin	ラウンドロビンロードバランスを有効にする。これを設定できるのは kregedit だけである。設定すると、これがほかのすべてのロードバランス方式よりも優先される	<p>1 - ラウンドロビンを有効にする</p> <p>0 - ラウンドロビンを無効にする (デフォルト)</p>
ServBroadcastInterval	クラスタ内のすべてのサーバ間の負荷情報の各ブロードキャスト間の時間 (秒単位)	負荷情報の各ブロードキャスト間の経過時間を秒単位で表す値

表 21 レジストリの CCS0¥LOADB パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
ServerLoadFactors¥ CPU-Usage	<p>サーバ負荷 (AgentLoadFactors¥ServerLoad) の計算における CPU 使用率の相対的な重要度。この数値はパーセントで指定される</p> <p>すべての ServerLoadFactors (CPU-Usage、Disk-Usage、Mem-Usage、および Exec-Reqs) の合計は 100 パーセントになるか、または Response-Time が 100 の場合は 0 にならなければならない</p> <p>RoundRobin を有効にすると、このロードバランス方式よりも優先される</p>	<p>0 以上 100 以下の数。デフォルトは 35。インストール値は 0</p> <p>(0 <= x <= 100)</p>
ServerLoadFactors¥ Disk-Usage	<p>サーバ負荷 (AgentLoadFactors¥ServerLoad) の計算におけるディスク使用率の相対的な重要度。この数値はパーセントで指定される</p> <p>すべての ServerLoadFactors (CPU-Usage、Disk-Usage、Mem-Usage、および Exec-Reqs) の合計は 100 パーセントになるか、または Response-Time が 100 の場合は 0 にならなければならない</p> <p>RoundRobin を有効にすると、このロードバランス方式よりも優先される</p>	<p>0 以上 100 以下の数。デフォルトは 25。インストール値は 0</p> <p>(0 <= x <= 100)</p>
ServerLoadFactors¥ Exec-Reqs	<p>サーバ負荷 (AgentLoadFactors¥ServerLoad) の計算において iPlanet Application Server で現在実行されているコンポーネントの合計数の相対的な重要度。この数値はパーセントで指定される</p> <p>すべての ServerLoadFactors (CPU-Usage、Disk-Usage、Mem-Usage、および Exec-Reqs) の合計は 100 パーセントになるか、または Response-Time が 100 の場合は 0 にならなければならない</p> <p>RoundRobin を有効にすると、このロードバランス方式よりも優先される</p>	<p>0 以上 100 以下の数。デフォルトは 5。インストール値は 0</p> <p>(0 <= x <= 100)</p>

表 21 レジストリの CCS0¥LOADB パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
ServerLoadFactors¥ Mem-Usage	サーバ負荷 (AgentLoadFactors¥ServerLoad) の計算 におけるメモリ使用率の相対的な重要 度。この数値はパーセントで指定され る すべての ServerLoadFactors (CPU-Usage、Disk-Usage、Mem-Usage、 および Exec-Reqs) の合計は 100 パーセ ントになるか、または Response-Time が 100 の場合は 0 にならなければなら ない RoundRobin を有効にすると、この ロードバランス方式よりも優先される	0 以上 100 以下の数。デフォルト は 35。インストール値は 0 (0 <= x <= 100)
ServerLoadFactors¥ Response-Time	これが 100 に設定されている場合、 ロードバランスには応答時間の統計だ けを使う Response-Time およびその他の ServerLoadFactors (CPU-Usage、 Disk-Usage、Mem-Usage、および Exec-Reqs) は相互に排他的。 Response-Time が 100 で、ほかのすべ てが 0 の場合、インストール後のロー ドバランス方式はサーバごとの応答時 間を基にする RoundRobin を有効にすると、この ロードバランス方式よりも優先される	0 または 100。デフォルトは 0。 インストール値は 100 (0 <= x <= 100)
ServLoadUpdateInterval	サーバ負荷情報の更新間隔 (秒単位)。 サーバ負荷の更新は、更新が実行され るまでに抽出したサーバ負荷データを 適用する	負荷情報の更新間の経過時間を秒 単位で表す値

ログパラメータ

レジストリの Logging パラメータを使うと、iPlanet Application Server のメッセージと HTTP Web サーバのメッセージを記録する機能を制御できます。レジストリを使って、ログによって生成されるメッセージの保存先やタイプを指定することもできますが、通常、ログサービスは iPlanet Application Server Administrator のログツールで設定します。

ログを使うと、アプリケーションレベルおよびシステムレベルのサービスが呼び出されるときに、これらのサービスによって生成されるメッセージを記録できます。コンポーネントオブジェクトがサービスにユーザリクエストの処理を要求すると、そのサービスが呼び出されます。たとえば、データアクセスリクエストが生成されると、コンポーネントオブジェクトがデータアクセスサービスを呼び出し、ログサービスがリクエストの処理に関するメッセージを出力するようにします。

ログサービスを設定して、次の3つのタイプのメッセージを記録することができます。

- **情報メッセージ**は、ステータス更新など、リクエストや通常のサービスアクティビティの処理について記述される
- **警告メッセージ**は、大きな問題になる可能性のある重大でない問題について記述される
- **エラーメッセージ**は、修復できそうにないサービスの重大な障害について記述される

ログの詳細については、『管理者ガイド』を参照してください。

この節で説明するパラメータはすべて、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

```
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CSS0¥LOGGING
```

UNIX

```
¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.0¥CSS0¥LOGGING
```

表 22 レジストリの CSS0¥LOGGING パラメータ

パラメータ	説明	許容値
DateFormat	年の表示形式に 2 桁または 4 桁のどちらを使うかを指定する	0 - 2 桁の表示形式 1 - 4 桁の表示形式 (デフォルト)
EnableEvtLog	サーバイベントのログを有効にする (イベントはコンソールに記録され、UNIX ではコンソールからファイルにリダイレクトされる)	0 - ログを無効にする 1 - ログを有効にする
EnableHTTPLog	1 に設定すると、HTTP リクエストのログが有効になり、コールバックインタフェース <code>gxclientlogcallback</code> が呼び出される	1 - HTTP リクエストのログを有効にする 0 - HTTP リクエストのログを無効にする (デフォルト)

表 22 レジストリの CSS0\LOGGING パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
EnableRotation	ログファイルのローテーションを有効にする	0 - ログのローテーションを無効にする 1 - ログのローテーションを有効にする
EvtBatchInterval	EvtDatabase で指定されるデータベースへのイベントログキャッシュの書き出し間隔	秒単位の数
EvtBatchSize	イベントログキャッシュのサイズ (レコード数)	0 より大きい数
EvtDatabase	接続するデータベースの名前。 EvtDataSource で指定されたタイプにする必要がある	論理名とは対照的な、実際のデータベース名 (EvtDataSource に格納されている)
EvtDataSource	イベント情報を記録するデータベースのユーザ定義の論理名	論理データベース名。DAE DataSources の下のエン트리と一致させる必要がある (24 ページの「データベースパラメータ」を参照)
EvtPswd	EvtUser で指定されるユーザ ID のパスワード	ユーザ ID のパスワード
EvtTable	ログメッセージが格納されるテーブルの名前	テーブル名
EvtUser	EvtDatabase で指定されたデータベースへの接続の下に作成されるユーザ ID	有効なユーザ ID
HttpBatchInterval	HttpDatabase で指定されるデータベースへの HTTP ログキャッシュの書き出し間隔	0 より大きい秒数
HttpBatchSize	HTTP ログキャッシュのサイズ (レコード数)	0 より大きい数
HttpDatabase	接続する特定のデータベースの名前。 HttpDataSource で指定されたタイプにする必要がある	論理名とは対照的な、実際のデータベース名 (HttpDataSource に格納されている)

表 22 レジストリの CSSO\LOGGING パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
HttpDataSource	HTTP リクエスト情報を記録するデータベースの論理名。これは、HttpDatabase で指定されたのと同じデータベースを参照する	論理データベース名。DAE DataSources の下のエン트리と一致させる必要がある (24 ページの「データベースパラメータ」を参照)
HttpPswd	HttpUser で指定されるユーザ ID のパスワード	有効なパスワード
HttpTable	HTTP ログメッセージが格納されるテーブルの名前	有効なテーブル名
HttpUser	HttpDatabase で指定されたデータベースへのコネクションの下に作成されるユーザ ID	有効なユーザ ID
LogEventDB	EvtDataBase で指定されたデータベースへのイベントのログを有効にする	<ol style="list-style-type: none"> 1 - データベースにイベントを記録する 2 - データベースにイベントを記録しない
Mode	ログのレベル	<ol style="list-style-type: none"> 1 - 情報だけを出力する 2 - 情報と警告を出力する 3 - すべてのメッセージを出力する
ProcessConsole	サーバプロセスコンソールウィンドウにメッセージを出力する	<ol style="list-style-type: none"> 1 - コンソールにログメッセージを出力する 0 - コンソールにログメッセージを出力しない
RotateTime	ログのローテーションの日時を格納する	0: 0: 0 および日付 / 月 / 曜日の形式の時間
Text	テキストファイルへのログ情報の格納を有効にする	<ol style="list-style-type: none"> 0 - テキストファイルへのログを無効にする 1 - テキストファイルへのログを有効にする
TextPath	ログ情報が格納されるファイルの名前	<p>有効なファイル名</p> <p>サーバは、属性を TextPath に追加して、別のサーバプロセスのログファイル名を区別する</p>

MSGDB パラメータ

レジストリの MSGDB セクションは、ローカリゼーションのために使われます。

この節で説明するパラメータは、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥MSGDB

UNIX

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥MSGDB

表 23 レジストリの CCS0¥MSGDB パラメータ

パラメータ	説明	許容値
Locale	メッセージの言語ロケールを含む	有効な言語ロケール en_US
MSGDBPath	メッセージファイルはサーバが、メッセージを読み込むのに使われる。メッセージファイルの場所がこのパラメータに格納される	iPlanet Application Server ユーザがパーミッションを利用できる有効なディレクトリ。 デフォルト値は <i>install_dir</i> ¥APPS

コンポーネントリクエストマネージャとパスパラメータ

パスパラメータは、iPlanet Application Server がコンポーネント、照会、サーバ、およびテンプレートを検索する場所を制御します。リクエストマネージャのパラメータは、iPlanet Application Server がリクエストを処理するために使うスレッドプールを制御します。

この節で説明するパラメータは、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥QUERY

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥REQ

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥SYSTEM_JAVA

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥TEMPLATE

UNIX

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥QUERY

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥REQ

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥SYSTEM_JAVA

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥TEMPLATE

表 24 レジストリのコンポーネントリクエストマネージャとパスパラメータ

パラメータ	説明	許容値
QUERY¥PATH	実行時サーバが SQL 照会ファイル (.GXQ) を検索して読み込むために使うルートパスの、セミコロンで区切られたリスト。すべての .GXQ ファイルをルートパスに基づいてファイルシステムに置く必要がある。iPlanet Application Server での照会ファイルの読み込みに問題がある場合は、まずこの値をチェックし、パスが .GXQ ファイルの正しい場所を指していることを確認する	.GXQ ファイルを検索する有効なルートパスのリスト デフォルトは <i>install_dir¥ias¥APPS</i>

表 24 レジストリのコンポーネントリクエストマネージャとパスパラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
REQ¥ThreadInit	同時リクエストを処理するためにリクエストマネージャが最初に作成するスレッドの数。iPlanet Application Server 設定および TPM 要件に基づいてこのパラメータを設定できる	iPlanet Application Server サーバをマルチプロセスのシングルスレッドモード (MP/ST) で実行するには、このパラメータと次の 2 つの Thread パラメータ (ThreadMax、ThreadMin) を 1 に設定する 注: ThreadInit、ThreadMax、および ThreadMin は、33 ページの「エンジンパラメータ」で説明されている ENG¥ エンジン番号 パラメータの下に、エンジンごとに設定することもできる
REQ¥ThreadMax	スレッドプール内のスレッドの最大数。iPlanet Application Server 設定および TPM 要件に基づいてこのパラメータを設定できる	iPlanet Application Server サーバをマルチプロセスのシングルスレッドモード (MP/ST) で実行するには、このパラメータ (および ThreadInit と ThreadMin) を 1 に設定する 注: ThreadInit、ThreadMax、および ThreadMin は、33 ページの「エンジンパラメータ」で説明されている ENG¥ エンジン番号 パラメータの下に、エンジンごとに設定することもできる

表 24 レジストリのコンポーネントリクエストマネージャとパスパラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
REQ¥ThreadMin	スレッドプール内のスレッドの最小数。iPlanet Application Server 設定および TPM 要件に基づいてこのパラメータを設定できる	iPlanet Application Server サーバをマルチプロセスのシングルスレッドモード (MP/ST) で実行するには、このパラメータ (および ThreadInit と ThreadMax) を 1 に設定する 注: ThreadInit、ThreadMax、および ThreadMin は、33 ページの「エンジンパラメータ」で説明されている ENG¥ エンジン番号 パラメータの下に、エンジンごとに設定することもできる
REQ¥LowaterMark	キューで利用可能になっている必要のあるリクエストの最小数	デフォルトは 8
REQ¥HighwaterMark	キューで利用可能になっている必要のあるリクエストの最大数	デフォルトは 128
REQ¥LoRequestQueue	使われていない	
REQ¥HiRequestQueue	使われていない	
REQ¥StepMax	リクエストを処理するときに iPlanet Application Server で実行できる手順の最大数。必要な手順の最大数は 8 を超えることはできない	デフォルトは 200
REQ¥ FlowControlEnabled	1 に設定されている場合、LowaterMark および HighwaterMark によって指定されたリクエストフロー制御を有効にする	0 または 1。デフォルトは 1
REQ¥Debug	1 に設定された場合、デバッグのためのログファイルへの情報の書き込みを有効にする	0 または 1。デフォルトは 0

表 24 レジストリのコンポーネントリクエストマネージャとパスパラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
SYSTEM_JAVA¥ GX_CLASSPATH	<p>実行時 Java サーバ (KJS) がコンポーネントを検索して読み込むために使うルートパスの、セミコロンで区切られたリスト</p> <p>廃止された Applogics を使っている場合を除いて、この値を変更する必要はない</p>	<p>Java コンポーネントの有効なルートパスのリスト</p> <p>例</p> <p>C¥:NAS211¥APPS¥ GXAPP¥BASE¥JAVA</p>
SYSTEM_JAVA¥ GX_CLASSPATH_CORE	<p>KJS クラスローダの代わりに JDK クラスローダが読み込むサーバおよびコンポーネントクラスを識別するために、実行時 KJS サーバが使う接頭辞の、セミコロンで区切られたリスト。コンポーネントがネイティブメソッドを使う場合は、そのパッケージ名の接頭辞をこのパラメータに追加する必要がある</p> <p>廃止された Applogics を使っている場合を除いて、この値を変更する必要はない</p>	<p>JDK クラスローダが読み込む Java クラスの接頭辞のリスト</p> <p>例</p> <p>"java.;com.kivasoft"</p>
TEMPLATE¥PATH	<p>実行時サーバがテンプレートファイルを検索して読み込むために使うパスの、セミコロンで区切られたリスト。iPlanet Application Server でのテンプレートの評価に問題がある場合は、まずこの値をチェックする</p> <p>注: テンプレートは evalTemplate を使って評価される。これは、テンプレートの入力方法を指定するために上書きするクラスである</p>	<p>テンプレートファイルを検索する有効なルートパスのリスト</p> <p>例</p> <p>C:¥HTML</p>

ステートパラメータ

レジストリの State セクションには、Executive Server のホストと IP アドレスが含まれています。

この節で説明するパラメータは、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥State

UNIX

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥State

表 25 レジストリの CCS0¥State パラメータ

パラメータ	説明	許容値
Host	Executive Server エンジンのホストと IP アドレス	有効な IP アドレス
Port	Executive Server エンジンのポート	有効なポート番号。デフォルトのインストールポートは 10819

セキュリティパラメータ

セキュリティは iPlanet Application Server レジストリ全体でいくつかのパラメータによって処理されます。次の領域がセキュリティパラメータの影響を受けます。

- ACL データベース
- Principal データベース
- コンポーネント ACL
- 暗号化
- デフォルトアクセス

ACL データベース

アクセス制御リスト (ACL) は iPlanet Application Server Administrator または kreg ツールを使って作成できます。

この節で説明するパラメータは、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥ACL¥DB0

UNIX

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥ACL¥DB0

表 26 ACL セキュリティパラメータ

パラメータ	説明	許容値
ACL name	アプリケーションリソースのアクセスチェックの実行に使用できる匿名 ACL	匿名 ACL の名前
iAS Administration¥DataString	管理用の暗号化されたアクセス制御リスト	この値は変更しないこと
iAS Deployment¥DataString	配置用の暗号化されたアクセス制御リスト	この値は変更しないこと

Principal データベース

ユーザとグループのセキュリティは、レジストリの **Principal** データベースセクションで定義されます。このセクションのキーは、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥PRINCIPAL¥DB0

UNIX

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥PRINCIPAL¥DB0

表 27 レジストリの Principal データベースセキュリティパラメータ

パラメータ	説明	許容値
User name	iPlanet Application Server で認識されるユーザの名前	有効なユーザ名
User name¥Type	ユーザ名エントリのタイプ	1 - User タイプ (Group タイプとは対照的)
User name¥AuthData:0	ユーザの認証データ (パスワード)	ユーザ名に対する有効なパスワード
Group name	iPlanet Application Server で認識されるユーザグループ	有効なグループ名
Group name¥Type	グループエントリのタイプ	2 - Group タイプ (User タイプとは対照的)

表 27 レジストリの Principal データベースセキュリティパラメータ (続き)

Group name¥user1	iPlanet Application Server で認識されるユーザグループ内のユーザの名前。	指定されたグループの有効なユーザ名
... ¥user2	グループ名の下に複数のユーザを一覧表示できる	
... ¥user3		

コンポーネント ACL

ClassImp パラメータには、iPlanet Application Server のコンポーネントのアクセス制御リスト (ACL) が含まれています。詳細については、16 ページの「ClassImp パラメータ」を参照してください。

暗号化

レジストリの暗号化パラメータは、Web サーバと iPlanet Application Server 間の暗号化を制御します。

この節で説明するパラメータは、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥SECURITY

UNIX

¥SOFTWARE¥iPlanet¥ClassImp¥Application Server¥6.5¥CCS0¥SECURITY

表 28 レジストリの CCS0¥SECURITY パラメータ

パラメータ	説明	許容値
EnableEncryption	D に設定すると、プラグインと KXS 間のメッセージは、暗号化が true に設定されているコンポーネントに対して選択的に暗号化される。0 に設定すると、メッセージは暗号化されない	D - 暗号化を有効にする 0 - 暗号化を無効にする
LogEncryption	1 に設定すると、メッセージの暗号化と復号化がログに表示される。デフォルトでは作成されない。使う場合は、このキーを作成する必要がある	0 または 1

コンポーネントごとに暗号化を適用することもできます。これを行うには、セキュリティを有効にする必要がある各コンポーネントの .GXR 登録ファイルに `:encrypt=y` パラメータを追加します。その後、変更した各 .GXR ファイルに対して `kreg` コマンドを実行します。

次に、編集後の .GXR ファイルの例を示します。

```
component chain1::sample:encrypt=y
{0f6d8120-6e1f-11cf-96fd-0020afed9a65}
GXApp/Sample/chain1.class
```

セキュリティモジュールのログメッセージを表示するには、次のキーを参照します。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥SECURITY
```

Windows NT と UNIX

「編集」>「値を追加」を選択し、「名前」フィールドに「LogEncryption」と入力します。「値」フィールドに「1」と入力すると、ログメッセージが表示されます。「0」を入力すると、ログメッセージの表示機能がオフになります。「タイプ」フィールドで、「整数」を選択します。「OK」を選択します。

デフォルトアクセス

デフォルトアクセスパラメータは、コンポーネントを実行するパーミッションをコンポーネント ACL が明示的に否定または許可していないユーザを **iPlanet Application Server** で処理する方法を制御します。デフォルトアクセスパラメータは、コンポーネントグループごとに指定できます。

コンポーネント ACL セキュリティの詳細については、16 ページの「ClassImp パラメータ」を参照してください。

この節で説明するパラメータは、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

```
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥Security¥Request
```

UNIX

```
¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥Security¥Request
```


表 29 レジストリの CCS0¥Security¥Request パラメータ

パラメータ	説明	許容値
Request¥DefaultAccess	Request¥Groups の下に一覧表示されるコンポーネントグループのデフォルトアクセス。グループのユーザ定義 DefaultAccess パラメータ (次の Request¥Groups¥Group Name¥DefaultAccess を参照) が存在する場合は、このグローバルなデフォルトよりも優先される	0 - 無視 1 - 許可しない 4 - 許可する
Request¥Groups¥グループ名	コンポーネントグループ。グループごとに、デフォルトアクセスパラメータが定義される	有効なコンポーネントグループ名
Request¥Groups¥グループ名 ¥DefaultAccess	特定のコンポーネントグループ内の、グループのユーザ定義 DefaultAccess パラメータ。Request¥DefaultAccess の値よりも優先される	0 - 無視 1 - 許可しない 4 - 許可する

TXNMGR パラメータ

レジストリの TXNMGR セクションには、トランザクションマネージャログのパラメータが含まれています。

この節で説明するパラメータは、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥TXNMGR

UNIX

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥CCS0¥TXNMGR

表 30 レジストリの CCS0¥TXNMGR パラメータ

パラメータ	説明	許容値
DefaultTxnType	ローカルまたはグローバル どちらかの、トランザク ションのタイプを決定する	デフォルトはローカル
LogDirectory	トランザクションマネー ジャのログファイルの場所 をポイントする	デフォルトは <i>iasInstallDir/ias/logs/jts</i>
MonitoringEnabled	トランザクションの監視を 有効または無効にする	0 - 無効 1 - 有効 デフォルトは 0
RecoveryEnabled	リカバリが有効にされると、 KJS が再起動するときに保 留中のトランザクションが リカバリされる	0 - 無効 1 - 有効 デフォルトは 0
StatEnabled	トランザクションプロセス についての統計のコレク ションを有効または無効に する	0 - 無効 1 - 有効 デフォルトは 0
Timeout	デフォルトのトランザク ションタイムアウト	デフォルトは 60 秒
TimerThreadInterval	タイムアウトになったトラ ンザクションを削除するた めにタイムアウトスレッド が呼び出される時間間隔	デフォルトは 30 秒

表 30 レジストリの CCS0¥TXNMGR パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
TraceEnabled	トランザクションの追跡を有効または無効にする	0 - 無効 1 - 有効 デフォルトは 0
TraceFile	追跡データがこのファイルに書き出される	デフォルトは <i>iASInstallDir/ias/logs/txntrace</i>
TraceLevel	追跡レベルを 6 つの異なるレベルに設定できる。各レベルは異なるパラメータを追跡する 追跡レベルについては、『管理者ガイド』を参照	0 - 追跡レベルを無効にする 1 - リカバリの追跡 2 - 設定の追跡 3 - タイムアウトの追跡 4 - 高レベルのトランザクションの追跡 5 - トランザクションの追跡 6 - ログの追跡 デフォルトは 0
WaitInterval		デフォルトは 0
ENGid#	アプリケーションサーバエンジンで登録された ORB ポート番号	
ENGid#	トランザクションマネージャの内部的な ORB ポート番号	

データソースパラメータ

Current Control Set (CCS0) キーの直下にある DataSource キーには、アプリケーションサーバで登録されたすべてのデータソースのリストが含まれています。

データソースを削除するには、iPlanet レジストリから関連するエントリを削除する必要があります。データソースは、レジストリの次の領域に配置されます。

Windows

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\DataSource
```

UNIX

```
Software\iPlanet\Application Server\6.5\DataSource
```

登録されたデータソースを削除するには

1. 削除するデータソースキーを選択します。
2. 「編集」 > 「削除」 コマンドを選択します。
選択した内容を確認します。
3. iPlanet Application Server を停止し、再起動します。

注 データソースを設定した後にだけ、以下のキーが作成されます。キーの値は、Administration Tool を使用してデータソースを設定している間に指定したものです。

以下のキーは、Administration Tool 内でデータソースの設定中に指定したデータソース識別子に従って作成されます。

表 31 レジストリのトップレベルの DataSource パラメータ

パラメータ	説明	許容値
databaseName	アプリケーションサーバで使われるデータベースのタイプ	データベース名 デフォルト値はない
datasourceName	データソース名	デフォルト値はない
debug		
description	このデータソースの説明	データソースを識別するための説明。 たとえば MyOracleDataSource デフォルト値はない

表 31 レジストリのトップレベルの DataSource パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
driver-name	ドライバの名前	たとえば Oracle9i デフォルト値はない
incrementPoolSize	より大きな負荷に対応するためにプールで獲得するコネクション数	デフォルト値は 1
initialPoolSize	コネクションプールからデータベースドライバが最初に獲得するコネクション数	デフォルト値は 1
isSanityRequired	妥当性を有効または無効にする	True - 有効 False - 無効 デフォルトは True
maxIdleTime	プールがアイドルコネクションを保持する時間 (秒数)	デフォルトは 120
maxPoolSize	データベースへの物理コネクションの最大数	デフォルトは 30
minPoolSize	プールに維持される最低コネクション数	デフォルトは 1
networkProtocol	トランザクションマネージャと通信するためにドライバに使用されるプロトコル	たとえば、jdbc:oracle:thin
password	データベースに接続するためにユーザに必要なパスワード	デフォルト値はない
portNumber	データソースに接続するためにプールに使用されるポート	デフォルト値はない
propertyCycle		
queueLength	キュー内で維持されるコネクション数	デフォルトは 30
reclaimTime	アプリケーションに使用される、プールがコネクションを取り戻すまでの時間 (秒数)	デフォルトは 600

表 31 レジストリのトップレベルの DataSource パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
roleName	最初の SQL ロール名	デフォルト値はない
serverName	データベースサーバ名	デフォルト値はない
tableBasedSanity	テーブルベースの妥当性を有効または無効にする	True - 有効 False - 無効 デフォルトは False
tableName	テーブルベースの妥当性が有効にされたときに使用される、データソーステーブルの名前	たとえば、ias_table デフォルト値はない
trace	コネクションプールの追跡を有効または無効にする	Enable - 有効 Disable - 無効 デフォルトは Disable
user	データベースユーザのアカウント名	デフォルト値はない
waitQueueEnabled	コネクションが利用できるようになるまで待機するコネクションプールキューを有効または無効にする	True - 有効 False - 無効 デフォルトは True
waitTimeInQueue	データベースへのコネクションが利用できるようになるまで、プールがキュー内でリクエストを保持する時間 (秒数)	デフォルトは 120
DataBaseUrl	データベースクライアントが存在する URL	Oracle データベースの例： jdbc:oracle:thin@host:port:database
DataSource	クライアントで保持されているデータベースサーバ識別情報に対応する	たとえば、Oracle の tnsnames.ora のエントリや Sybase のインタフェースファイル
DriverType	有効なデータベースドライバタイプ	サードパーティドライバのタイプには、ユーザ定義の名前を付けることができる。ネイティブの DAE および DAE2 ドライバは、iPlanet Application Server データベースドライバの命名規則に準拠しなければならない (詳細については、24 ページの「データベースパラメータ」を参照)

表 31 レジストリのトップレベルの DataSource パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
PassWord	データベース管理者の暗号化されたパスワード	dbsetup コマンドを使ってパスワードを登録する必要がある
UserName	データベース管理者のユーザ名	dbsetup コマンドを使って UserName を登録する必要がある

配置パラメータ

レジストリの Deployment パラメータセクションには、Deployment Management ツールで使われる値が含まれています。

配置のための値は、レジストリの次の領域で使用できます。レジストリのこのセクションの値は変更しないでください。

Windows

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥Deployment

UNIX

Software¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥Deployment

表 32 レジストリの Deployment パラメータ

パラメータ	説明	許容値
JarPath	Deployment Tool で使われる JAR ファイルへのディレクトリパス	有効なディレクトリパス
Install¥Datasource properties	アプリケーションサーバでデータソースを登録するコマンド	この値は変更しないこと
Install¥EJB properties	アプリケーションサーバで EJB を登録するコマンド	この値は変更しないこと
Install¥NTV	アプリケーションサーバで Servlet を登録するコマンド	この値は変更しないこと
Install¥Regedit	アプリケーションサーバのレジストリエディタを開くコマンド	この値は変更しないこと
Install¥Registry	アプリケーションサーバの単層型レジストリファイルを閉じるコマンド	この値は変更しないこと

表 32 レジストリの Deployment パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
LogicalName¥ NAS_APPBIN	Application Server でインストールされているアプリケーションバイナリファイルへのディレクトリパス	この値は変更しないこと
LogicalName¥ NAS_APPROOT	Application Server でインストールされているアプリケーションのルートディレクトリ	この値は変更しないこと
LogicalName¥ WWW_DOCROOT	Application Server のオンラインマニュアルのルートディレクトリパス	この値は変更しないこと

GMS パラメータ

レジストリの GMS セクションには、ロードバランスに使われる Global Message Service (GMS) のマルチキャストパラメータが含まれています。

この節で説明するパラメータは、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥GMS

UNIX

Software¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥GMS

表 33 レジストリの GMS パラメータ

パラメータ	説明	許容値
MCastHops	ロードバランサで使われるマルチキャストホップ数	デフォルトは 1
MCastHost	ロードバランサで使われるマルチキャスト IP アドレス	デフォルトは 228.8.18.71
MCastPort	ロードバランサで使われるマルチキャストポート	デフォルトは 9608
UDPEchoPort	GMS の UDP Ping ポート。レジストリにこのキーが見つからない場合は、作成される	有効なポート番号。デフォルトは 9610
UDPPort	GMS の UDP ポート	デフォルトは 0

表 33 レジストリの GMS パラメータ (続き)

パラメータ	説明	許容値
Servers¥IP_address	この iPlanet Application Server と同じネットワークにあって、iPlanet Application Server インストールもあるすべてのマシンの IP アドレス	有効な IP アドレスのリスト

J2EE-Application

レジストリの J2EE-Application セクションのパラメータには、Application Server で登録されたすべての J2EE アプリケーションの ACL ロール名とアプリケーションパスが含まれています。

この J2EE-Application セクションは、レジストリの次の領域にあります。

Windows NT

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥J2EE-Application

UNIX

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥J2EE-Application

J2EE-Module

J2EE-Module セクションには、Application Server で登録されたモジュールについてのメタ情報が含まれています。System キーおよび Boot キーは変更しないでください。

この J2EE-Module セクションは、レジストリの次の領域にあります。

Windows NT

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥J2EE-Module

UNIX

¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥J2EE-Module

Java パラメータ

レジストリの Java セクションには、Java クラスおよびライブラリへのパスが一覧表示されます。このキーを使って、JVM へのパスを指定し、実行時に Java エンジンへの Java 引数を設定することもできます。

この節で説明するパラメータは、レジストリの次の領域にあります。

Windows NT

HKKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥Java

UNIX

(存在しない)

表 34 レジストリの Java パラメータ

パラメータ	説明	許容値
ClassPath	アプリケーションサーバの Java エンジンが必要とする Java クラスパスの、セミコロンで区切られたリスト	有効な Java クラスパス
JVM	Java エンジンで使われる JVM	インストールされた JVM への有効なパス
JavaArgs	起動時に Java エンジンに送られる引数	有効な Java 引数
LibPath	Java エンジンで使われる Java ライブラリパスの、セミコロンで区切られたリスト	有効な Java ライブラリパス

National Language Support パラメータ

レジストリの NLS セクションは、National Language Support を有効または無効にするために使われます。

この節で説明するパラメータは、レジストリの次の場所にあります。

Windows NT

```
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥NLS
```

UNIX

```
SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥NLS
```

表 35 レジストリの NLS パラメータ

パラメータ	説明	許容値
INTERNATIONAL	National Language Support を有効または無効にする	0 の場合は無効 1 の場合は有効

IASAT パラメータ

レジストリの IASAT セクションには、iPlanet Application Server Administration Tool のログインと設定の基本情報が含まれています。

この節で説明するパラメータは、レジストリの次の領域で使用できます。

Windows NT

```
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥IASAT
```

UNIX

```
¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥IASAT
```

表 36 レジストリの IASAT パラメータ

パラメータ	説明	値
MaxTimeout	エラーメッセージが生成されるまで、サーバがエンジンの起動を試みる時間	デフォルトは 60 許容値は 0 から最大間隔まで (秒単位)
MaxTimeoutLogin	エラーメッセージが生成されるまで、サーバがログインを試みる時間	デフォルトは 20 許容値は 0 から最大間隔まで (秒単位)

表 36 レジストリの IASAT パラメータ (続き)

パラメータ	説明	値
MaxTimeoutProcessControl	エラーメッセージが生成されるまで、サーバがプロセスの作成を試みる時間	デフォルトは 60 許容値は 0 から最大間隔まで (秒単位)
Login¥Server_IP¥name	アプリケーションサーバの名前	デフォルトは iAS1
Login¥Server_IP¥password	管理ユーザの暗号化されたパスワード	変更しないこと
Login¥Server_IP¥username	管理ユーザのユーザ名	有効なユーザ名
Login¥Server_IP¥Groups	Application Server での管理操作の実行を許可されている ACL グループのリスト	有効なユーザグループ
Plots¥id	Application Server を監視するために使われるグラフプロット数	管理者が Administration Tool を使ってサーバを監視するためにプロットを設定した場合を除いて、空。 プロットが設定されている場合、この数値は作成されるプロットラインの数を表す
Plots¥Plot_number	サーバ監視グラフで監視プロットラインに関連付けられた数	
Plots¥Plot_number¥attr	サーバ監視グラフのプロットラインで監視する属性	有効なプロット属性。この値は通常、Administration Tool で設定される。Administration Tool から使用できるプロセス追跡の属性は 15 ほどある 許容値は 平均実行時間 リクエスト数 / 間隔 リクエスト数の合計
Plots¥Plot_number¥color	サーバ監視グラフのプロットラインで使う色	有効なプロットラインの色。この値は通常、Administration Tool で設定される 許容値は 赤、緑、青、マゼンタ

表 36 レジストリの IASAT パラメータ (続き)

パラメータ	説明	値
Plots¥Plot_number¥name	グラフで監視するサーバの名前	有効なサーバ名。この値は通常、Administration Tool で設定される
Plots¥Plot_number¥process	グラフで監視するプロセスの名前	有効なプロセス名。この値は通常、Administration Tool で設定される
Plots¥Plot_number¥scale	サーバ監視グラフで表されるスケール	有効なスケール。この値は通常、Administration Tool で設定される 許容値は 1:1 10:1 1:10 1:100 1:1,000 1:10,000 Administration Tool では、ほかの値も設定できる
Plots¥Plot_number¥server	登録された監視対象のサーバの名前	有効なサーバインスタンス。この値は通常、Administration Tool で設定される

jndiConfig パラメータ

レジストリの jndiConfig セクションには、EJB の作成、メールサービス、JMS パブリッシングなどの特定の機能を実行するために Application Server で必要とされる Java クラスの JNDI ハンドラ名が含まれています。

このセクションは、レジストリの次の領域にあります。

Windows NT

```
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥jndiConfig
```

UNIX

```
¥SOFTWARE¥iPlanet¥Application Server¥6.5¥jndiConfig
```

デバッグパラメータ

iPlanet Application Server レジストリには、デバッグに役立ついくつかのパラメータが含まれています。これらのパラメータは、レジストリのさまざまなセクションにあります。特定のモジュールで問題が発生した場合は、適切なデバッグパラメータのあるレジストリのセクションに移動し、エラーログに情報を収集するスイッチをオンにします。レジストリのパラメータを変更したら、必ず iPlanet Application Server を再起動します。

エラーログに影響を与えるすべてのパラメータを有効にするのは、発生している問題を診断する場合だけにします。デバッグが終了したら、必ずパラメータを無効にしてください。そうしないと、ログファイルのサイズが急速に増大を続け、マシンの空きディスク容量を占領してしまいます。

次の表に、デバッグするモジュールに応じて、iPlanet Application Server のデバッグパラメータをまとめます。

表 37 デバッグパラメータ

モジュール	パラメータ	説明	許容値
データアクセスエンジン (DAE)	SOFTWARE\iPlanet Application Server\6.5\CCS0\DAE2\CacheDebugMsgs	サポートされる各ドライバ (ODBC、DB2_CLI、INFORMIX_CLI、ODBC_CLI、および SYBASE_CTLIB) に関する情報を DAE がエラーログに出力できるようにする。デバッグメッセージの末尾にある括弧付きの番号は、メッセージが適用されるコネクション番号	0 - デバッグを無効にする 1 - デバッグを有効にする
データアクセスエンジン (DAE)	SOFTWARE\iPlanet Application Server\6.5\CCS0\DAE2\SQLDebugMsgs	iPlanet Application Server コンソールで実行されるすべての SQL ステートメントを出力できるようにする	0 - コンソールへの出力を無効にする 1 - コンソールへの出力を有効にする

表 37 デバッグパラメータ (続き)

モジュール	パラメータ	説明	許容値
Web コネク タプラグイ ン (HTTPAPI)	SOFTWARE¥iPlanet¥ Application Server¥6. 5¥CCS0¥HTTPAPI¥D ebugMode	Web コネクタプラグイ ンのエラーログにダンプ される情報の量を決め る。iPlanet Web Server だ けに適用される	0 (デフォルト) - 最小 限のエラー情報を提供 する 1 および 2 - 0 の場合よ りも多くの情報を提供 する 3 - 最大限のエラー情 報を提供する 注: このパラメータの 値を変更した場合、新 しい値を有効にするに は、iPlanet Application Server ではなく、 iPlanet Web Server を再 起動する
コネクショ ンマネー ジャ (CONN)	SOFTWARE¥iPlanet¥ Application Server¥6. 5¥CCS0¥CONN¥Debu gLevel	コネクション、送受信、 コネクションの解除な ど、CONN に関連する イベントの情報を出力す る	1 ~ 4 の値。1 の場合 は詳細度がもっとも低 く、4 の場合はもっと も高い 1 - 新しいコネクショ ンとコネクシオンク ローズの情報を記録す る 2 および 3 - アクティ ビティについての情報 を記録し、クラスタ内 のほかのマシンが稼働 しているかどうかを チェックする 4 - 送受信されるすべ ての packets について の情報を記録する

表 37 デバッグパラメータ (続き)

モジュール	パラメータ	説明	許容値
ロードバランサ (LOADB)	SOFTWARE%iPlanet% Application Server%6.5%CCS0%LOADB%Log	ロードバランサがエラーログに出力する情報の種類を指定する	<p>1 - サーバ間でリダイレクトされるすべてのコンポーネントリクエストを記録する (<i>log_redirect</i>)</p> <p>2 - サーバが収集および受信するすべてのサーバ負荷統計を記録する (<i>log_server_info</i>)</p> <p>4 - サーバが収集および受信するすべてのコンポーネント統計を記録する (<i>log_applogic_info</i>)</p> <p>値は、デバッグの詳細度に応じた、OR 演算の対象にすることができるビット位置。たとえば、値 3 (1 2) は、リクエストのリダイレクトとホスト情報の組み合わせを示す</p>

コマンドラインツール

次の iPlanet Application Server コマンドラインツールは、`iAS6¥ias¥bin¥` ディレクトリにあります。

beanreg

beanreg コマンドを使うと、アプリケーションサーバで JavaBeans を登録できます。

使用法: `beanreg [-l local/kreg only] [-b BMDI only] [-n naming only]`
`[-d debug] [-r remove bean] [-p print mangled methods] properties_file |`
`serialized_descriptor`

build

build コマンドは、ANT ビルダを使ってアプリケーションを構築します。ANT ビルダの詳細、およびこのコマンドの使用法については、次のサイトを参照してください。

<http://developer.iplanet.com/appserver/samples/docs/build.html>

charsetconv

charsetconv は廃止されたコマンドです。

convert2jsp11

このコマンドの使用法と使用目的については、『iPlanet Application Server 移行ガイド』を参照してください。

使用法: `convert2jsp11 [-r] -ap appPath file/directory`

表 38 convert2jsp11 のオプション

オプション	説明
-ap	appPath を指定する
-r	オプション。再帰的にディレクトリをスパンして JSP ファイルを変換する必要がある場合に指定する

ファイルやディレクトリは常に、`appPath` に対して相対的に指定する必要があります。

convertNtv2Xml

このコマンドの使用法と使用目的については、『iPlanet Application Server 移行ガイド』を参照してください。

使用法: `convertNtv2Xml $path/appInfo.ntv $target-path/myApp.xml`

オプションは次のとおりです。

表 39 `convertNtv2Xml` のオプション

オプション	説明
<code>\$path</code>	<code>appInfo.ntv</code> へのパス
<code>\$target-path</code>	XML ファイルを格納する場所
<code>\$myApp.xml</code>	作成する XML ファイルの名前

convertProps2Xml

このコマンドの使用法と使用目的については、『iPlanet Application Server 移行ガイド』を参照してください。

dbsetup

`dbsetup` コマンドは、Database Connectivity Setup ユーティリティを起動します。

deploycmd

`deploycmd` コマンドは廃止されました。代わりに、`iasdeploy` コマンドを使います。

deploytool

`deploytool` コマンドは、iPlanet Application Server Deployment Tool を起動します。Deployment Tool の使用法を調べるには、Deployment Tool を起動して「チュートリアル」を選択します。

dsreg

dsreg コマンドは廃止されました。代わりに、iasdeploy コマンドを使います。

ejbc

ejbc コマンドを使うと、Enterprise JavaBeans をコンパイルできます。コマンドラインの構文は次のとおりです。

標準: `ejbc [options] home remote impl`

RMIC モード: `ejbc [options] -rmic remote`

オプションは次のとおりです。

表 40 ejbc のオプション

オプション	説明
-sl	ステートレスセッション Beans としてコンパイルする
-sf	ステートフルセッション Beans としてコンパイルする
-fo	可用性の高い、ステートフルセッション Beans になるようにコンパイルする
-cmp	コンテナ管理パーシスタンス (CMP) エンティティ Beans としてコンパイルする
-iiop	追加の CORBA クラスを生成する
-gs	Java ソースファイルを生成する
-d <i>dir</i>	出力ディレクトリを宣言する
-help	ヘルプメッセージを表示する
-rmic	RMIC コードを生成する (「使用法」を参照)
-classpath <i>classpath</i>	クラスパスを設定する (オプション -cp は廃止されたため、代わりにクラスパスを使う)
-javaccp <i>classpath</i>	javac クラスパスの接頭辞

ejbreg

ejbreg コマンドは廃止されました。代わりに、iasdeploy コマンドを使います。

iascontrol

iascontrol コマンドを使うと、コマンドラインからアプリケーションサーバエンジンインスタンスの起動と停止ができます。

使用法: `iascontrol subcommand [-instance instance | [-user user -password password] [-host host -port port]]`

サブコマンドは次のとおりです。

表 41 iascontrol サブコマンド

サブコマンド	説明
start	ローカルホストでアプリケーションサーバインスタンスを起動する。管理サーバがまだ起動されていない場合は起動する
stop	アプリケーションサーバのエンジンを停止する。管理サーバは停止しない
kill	アプリケーションサーバのすべてのプロセスをただちに強制終了する(ローカルホストのみ)

オプションは次のとおりです。

表 42 iascontrol のオプション

オプション	説明
-instance	Administration Tool で登録されたサーバインスタンスの名前
-user	指定されたサーバの管理権限を持っているユーザの名前
-password	ユーザに関連付けられたパスワード
-host	ターゲットサーバインスタンスのホスト名または IP アドレス
-port	アプリケーションサーバの Administration Server のポート番号。デフォルトはポート 10817
-help	使用法に関する情報を表示する

start コマンドおよび stop コマンドを使う前に、アプリケーションサーバの Administration Tool を使ってサーバインスタンスを登録する必要があります。

iasdeploy

EAR ファイルまたはモジュール (WAR または EJB JAR ファイル) を作成したら、コマンドラインインタフェースを使って J2EE モジュールまたはアプリケーションの配置、削除、および登録を行うことができます。

コマンドラインの使用法: `iasdeploy subcommand [options] operand`

サブコマンドは次のとおりです。

表 43 iasdeploy サブコマンド

サブコマンド	説明
<code>deployapp</code>	J2EE アプリケーションを配置する
<code>deploymodule</code>	J2EE EAR アプリケーション、Web アプリケーション、または EJB JAR 内にある J2EE EAR または EJB JAR モジュールを配置する
<code>removeapp</code>	J2EE アプリケーションとその関連モジュールを削除する
<code>removemodule</code>	J2EE EAR または Web アプリケーションの EJB JAR モジュール内にあるモジュールを削除する
<code>regdatasource</code>	JDBC データソースを登録する

オプションは次のとおりです。

表 44 iasdeploy のオプション

オプション	説明
<code>-verbose</code>	コマンドの実行中に追加情報を表示する
<code>-instance</code>	iPlanet Administration Tool を使って登録されたものとして、インスタンスを識別する。ホスト名、ポート番号、ユーザ名、およびパスワードを識別することは、ターゲットサーバインスタンスを識別することと同じ
<code>-host</code>	ターゲットアプリケーションサーバインスタンスのホスト名または IP アドレス
<code>-port</code>	アプリケーションサーバの Administration Server のポート番号。デフォルトはポート 10817
<code>-user</code>	指定されたアプリケーションサーバの配置権限を持っているユーザの名前
<code>-password</code>	ユーザに関連付けられたパスワード

表 44 iasdeploy のオプション (続き)

オプション	説明
-help	特定のサブコマンドのヘルプを表示する

サブコマンドが終了すると「completed successfully」というメッセージが表示されます。

正しく指定されていないオプションがある場合は、エラーメッセージが表示されます。

アプリケーションサーバインスタンスの指定

インスタンス名はホスト名、ポート番号、ユーザ名、およびパスワードを表す検索キーです。インスタンスオプションは iPlanet Administration Tool に登録されている名前としてインスタンス名を受け入れます。したがって、コマンドラインインタフェースを使ってアプリケーションを配置する場合は、AdminTool に登録したインスタンス名を識別させます。

ターゲットアプリケーションサーバインスタンスを指定するには、3つの方法があります。

- ローカルターゲットインスタンスを使う

インスタンス名を指定しない場合は、ローカルサーバインスタンスが使われます。ローカルサーバインスタンスは iPlanet Administration Tool を使って登録したインスタンスです。

次のようにします。iasdeploy deploymodule fortune.war

この例では、インスタンス引数が指定されていないので、ホスト名、ポート番号、ユーザ名、およびパスワードも識別されません。ローカルインスタンスが使われます。

- インスタンス名を指定する

次のようにします。iasdeploy deployapp -instance prodserver fortune.ear

この例では、fortune.ear アプリケーションを prodserver インスタンスに配置します。

インスタンス名を使うには、iPlanet Administration Tool を使って登録されている必要があります。

- 1つのアプリケーションサーバインスタンスのコネクションパラメータを指定する

次のオプションを使って、アプリケーションサーバインスタンスのコネクションパラメータを指定します。

-host は、ターゲットアプリケーションサーバインスタンスのホスト名または IP アドレスです。

-port は、アプリケーションサーバの Administration Server (KAS) のポート番号です。

-user は、指定したアプリケーションサーバの配置権限を持っているユーザの名前です。

-password は、-user に関連付けられたパスワードです。

次のようにします。iasdeploy deployapp -host bighost -port 1088
-user hanan -password hanansecret fortune.ear

これは、host、port、user、および password オプションを表すインスタンス名を持つ -instance オプションを使うことと同じです。

deployapp

このサブコマンドは、アプリケーションとしてサーバに J2EE アプリケーション EAR ファイルを配置します。

使用法: iasdeploy deployapp [-verbose] [-instance *instance...*] [-host *host* -port *port*] [-user *user* -password *password*]] *EAR_file*

<instance> は、iPlanet Administration Tool に登録されたインスタンス名です。

EAR_file は、配置する J2EE アプリケーション EAR ファイルのファイル名です (たとえば、myApp.ear)。

deploymodule

このサブコマンドは、指定された J2EE WAR または EJB JAR モジュールファイル、あるいは EAR ファイルを配置します。

使用法: iasdeploy deploymodule [-verbose] [-instance *instance...*] [-host *host* -port *port*] [-user *user* -password *password*]] [*module_file* | *EAR_file*]

module_file は、配置する J2EE WAR または EJB JAR モジュールのファイル名です。

EAR_file は、抽出して配置するモジュールの J2EE アプリケーション EAR ファイルのファイル名です。

オペランドがモジュール (WAR または EJB JAR ファイル) である場合は、そのまま配置されます。オペランドが EAR ファイルである場合は、含まれるすべてのモジュールが抽出されモジュールとして配置されます。配置した J2EE WAR または EJB JAR モジュール、あるいは EAR ファイルは、removemodule サブコマンドを使って削除できます。

removeapp

このサブコマンドは、アプリケーションサーバインスタンスから、配置された J2EE アプリケーション EAR ファイルを削除します。削除プロセスでは、アプリケーションサーバレジストリから関連するすべてのエントリを削除し、アプリケーションサーバインスタンスの配置領域から関連するファイルを削除します。

使用法: `iasdeploy removeapp [-verbose] [-instance instance...] [-host host -port port] [-user user -password password]] [EAR_file]`

EAR_file は、削除する J2EE アプリケーション EAR ファイルのファイル名です。

例: `iasdeploy removeapp fortune.ear`

アプリケーションサーバの設定状態は、アプリケーションの元の配置と同じ状態に戻ります。removeapp を使って削除できるのは、deployapp サブコマンドを使ってアプリケーションを配置した場合だけです。

removemodule

このサブコマンドは、アプリケーションサーバインスタンスから J2EE モジュールを削除します。削除プロセスでは、アプリケーションサーバレジストリから関連するすべてのエントリを削除し、アプリケーションサーバインスタンスの配置領域から関連するファイルを削除します。

使用法: `iasdeploy removemodule [-verbose] [-instance instance...] [-host host -port port] [-user user -password password]] [module_file | EAR_file]`

module_file は、削除する J2EE WAR または EJB JAR モジュールのファイル名です。

EAR_file は、削除する J2EE アプリケーション EAR ファイル (モジュールを含む) のファイル名です。

例: `iasdeploy removemodule fortune.war`

オペランドがモジュール (WAR または EJB JAR ファイル) である場合は、そのまま配置されます。オペランドが EAR ファイルである場合は、ファイル内のすべてのモジュールが削除されます。モジュールを削除できるのは、deploymodule サブコマンドを使ってモジュールとして配置した場合だけです。

regdatasource

このサブコマンドは、アプリケーションサーバを使って JDBC データソース定義を登録します。IASDataSource_1_0.dtd に基づいてビルドされた XML ファイルを入力として取得し、指定されたアプリケーションサーバインスタンスのアプリケーションサーバレジストリ内に JDBC データソースを登録します。

使用法: `iasdeploy regdatasource [-verbose] [-instance instance...] [-host host -port port] [-user user -password password]] datasource_XML_file`

datasource_XML_file は、データソース XML のファイル名です。

例: `iasdeploy regdatasource mydatasource.xml`

help

このオプションは特定のサブコマンドのヘルプを表示します。

使用法: `iasdeploy subcommand -help` または `iasdeploy -help subcommand`

例: `iasdeploy -help deployapp` または `iasdeploy deployapp -help`

`iasdeploy` コマンド、サブコマンド、およびオプションコマンドリストの詳細なヘルプと使用法を表示します。

idlj

使用法: `idlj [options] idl_file`

idl_file は IDL 定義を含むファイルの名前で、*[options]* は次のオプションの任意の組み合わせです。*idl_file* は必須で、必ず最後に付けます。

オプションは次のとおりです。

表 45 idlj のオプション

オプション	説明
<code>-d symbol</code>	これは IDL ファイルの次の行と同じ。 <code>#define symbol</code>
<code>-emitAll</code>	<code>#include</code> ファイルにあるものを含め、すべてのタイプを放出する
<code>-f side</code>	放出するバインドを定義する。 <i>side</i> は、 <code>client</code> 、 <code>server</code> 、 <code>all</code> 、 <code>serverTIE</code> 、 <code>allTIE</code> の一つ。 <code>serverTIE</code> および <code>allTIE</code> はデリゲートモデルスケルトンを放出する。このフラグが使用されない場合は、 <code>-fclient</code> が想定される
<code>-i include_path</code>	デフォルトでは、現在のディレクトリをスキャンして、含めるファイルを検索する。このオプションで、別のディレクトリが追加される
<code>-keep</code>	生成されるファイルがすでに存在している場合は、上書きしない。デフォルトでは、上書きされる
<code>-noWarn</code>	警告が表示されないようにする
<code>-pkgPrefix t prefix</code>	ファイルの範囲に <i>t</i> というタイプまたはモジュール名がある場合は、 <i>t</i> に対して生成されるすべてのファイルの Java パッケージ名を <i>prefix</i> で始める

表 45 idlj のオプション (続き)

オプション	説明
-td <i>dir</i>	現在のディレクトリではなく、出力ディレクトリに <i>dir</i> を使う
-v, -verbose	詳細モード
-version	バージョン番号を表示し、終了する

j2eeappreg

j2eeappreg コマンドは廃止されました。代わりに、iasdeploy コマンドを使ってアプリケーションをアプリケーションサーバに配置します。このコマンドでは、ローカルマシンだけにアプリケーションを配置できます。iasdeploy を使うと、アプリケーションをローカルにまたはリモートで配置できます。

JDBC SWITCH_NAS21

このコマンドの使用法と使用目的の詳細については、『iPlanet Application Server 移行ガイド』を参照してください。

jdbcsetup

jdbcsetup コマンドは NT のコマンドです。jdbcsetup は最大 3 つのサードパーティドライバをアプリケーションサーバで使うように設定できるユーティリティです。SOLARIS で db_setup または iPlanet Application Server Administration Tool を使って、サードパーティ JDBC ドライバを設定します。

kas

kas コマンドを使うと、サービスとして実行する代わりに、または UI 要素を使って起動する代わりに、コマンドラインからアプリケーションサーバを実行することができます。

使用法: kas [options] *params*

オプションは次のとおりです。

表 46 kas のオプション

オプション	説明
-install	サービスをインストールする
-remove	サービスを削除する
-debug <i>params</i>	デバッグのためにコンソールアプリケーションとして実行する
-cmd <i>params</i>	サービスでないアプリケーションとして実行する

kcs

kcs コマンドを使うと、詳細モードでコマンドラインから C+ エンジンを実行できます。

kjs

kjs コマンドを使って、対話型モードでコマンドラインから Java エンジンを実行します。

使用法:kjs [options]

オプションは次のとおりです。

表 47 kjs のオプション

オプション	説明
-help -usage /?-? -h	コマンドのヘルプを表示する
-init <i>file</i>	初期化ファイル
-port <i>port</i>	最初に受け入れるポート
-cset <i>cset</i>	現在の制御セット
-eng <i>engine</i>	現在のエンジン名
-iiop	IIOP から KCP ブリッジとして動作する現在のエンジン
-debug	詳細なデバッグメッセージ
-jdb	デバッグ可能モードで JVM を起動する

kreg

kreg コマンドを使って、アプリケーションサーバで Java アプリケーションまたはモジュールを登録します。

使用法: `kreg path_to_file.gxr`

これによって、AppLogic/Module 登録ユーティリティが起動します。AppLogic/Module 登録ユーティリティが呼び出されると、アプリケーションまたはモジュールを登録するための一連のパラメータが要求されます。

表 48 kreg のパラメータ

パラメータ	説明
AppLogic/Module name	登録するアプリケーションまたはモジュールの名前を入力する
GUID	アプリケーションまたはモジュールに関連付けられた GUID を入力する
path to JAVA PCODE	Java コードへのパスを入力する
path to COM DLM	配置記述子ファイルへのパスを入力する

kregedit

kregedit コマンドを使って、iPlanet レジストリエディタを起動します。

ksvradmin

ksvradmin コマンドを使って、iPlanet Application Server Administration Tool を起動します。

kxs

kxs コマンドを使って、対話型詳細モードでアプリケーションサーバの実行エンジンを起動します。

ldap

ldap コマンドを使って、ディレクトリサーバにマップするすべてのレジストリ設定を記述します。これらの設定については、この章の最初の部分で説明しました。これは ldap が呼び出された場合の画面のエコーです。

```
C:\iPlanet\bin>kreg -save kreg.out
"SOFTWARE\iPlanet\Application Server\ClassDef"
"SOFTWARE\iPlanet\Application Server\NameTrans"
"SOFTWARE\iPlanet\Application Server\Clusters"
"SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\EJB-Components"
"SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\ACL"
"SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\PRINCIPAL"
"SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\GMS"

"SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\DAE\DATASOURCES"
"SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\DAE2\DATASOURCES"
"SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\EB"
"SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\EXTENSIONS"
"SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\LOADB"
"SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\REQ"
"SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\SECURITY"
"SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\NLS"

Connected to LDAP server on requiem port 389

saving: SOFTWARE\iPlanet\Application Server\ClassDef
saving: SOFTWARE\iPlanet\Application Server\NameTrans
saving: SOFTWARE\iPlanet\Application Server\Clusters
saving: SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\EJB-Components
saving: SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\ACL
saving: SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\PRINCIPAL
saving: SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\GMS
saving: SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\DAE\DATASOURCES
saving: SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\DAE2\DATASOURCES
saving: SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\EB
saving: SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\EXTENSIONS
saving: SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\LOADB
saving: SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\REQ
saving: SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\CCS0\SECURITY
saving: SOFTWARE\iPlanet\Application Server\6.5\NLS
```

ldapdelete

ldapdelete コマンドを使って、指定した ldap 属性を削除します。

使用法: ldapdelete [options] [dn...]

オプションは次のとおりです。

表 49 ldapdelete のオプション

オプション	説明
-n	実行予定の内容を表示するが、実際には実行しない
-v	詳細モードで実行する (標準出力の診断)
-h host	LDAP サーバ名または IP アドレス
-p port	LDAP サーバの TCP ポート番号
-V n	LDAP プロトコルのバージョン番号 (2 または 3)。デフォルトは 3)
-Z	SSL で暗号化して接続する
-P pathname	SSL 証明書データベースへのパス
-N	SSL クライアント認証に使う証明書の名前
-K pathname	SSL クライアント認証に使うキーデータベースへのパス
-m pathname	セキュリティモジュールデータベースへのパス
-W	SSL キーのパスワード
-Q [token] [:certificate name]	PKCS 11
-X pathname	FORTEZZA 危殆化キーリスト (CKL)
-I pin	カードパスワードファイル
-D binddn	DN をバインドする
-w passwd	パスワードをバインドする (簡易認証用)
-E	サーバにバインド ID の表示 (レポート) を要求する
-R	自動的に参照をたどらない
-O hop lim	たどる参照ホップの最大数
-M	参照を管理する (通常のエントリとして扱う)

表 49 ldapdelete のオプション (続き)

オプション	説明
-0	LDAP ライブラリのバージョンの不一致を無視する
-i charset	コマンドライン入力のための文字セット (デフォルトはロケール)
-k dir	変換ルーチンディレクトリ (デフォルトは.)
-y proxydn	プロキシ承認に使われる DN
-H	使用方法に関する情報を表示する
-c	継続モード (エラーが発生しても停止しない)
-f file	ファイルから削除する DN を読み取る

ldapmodify

ldapmodify コマンドを使って、指定した ldap を変更します。次の設定を変更できません。

使用法: ldapmodify [options]

オプションは次のとおりです。

表 50 ldapmodify のオプション

オプション	説明
-n	実行予定の内容を表示するが、実際には実行しない
-v	詳細モードで実行する (標準出力の診断)
-h host	LDAP サーバ名または IP アドレス
-p port	LDAP サーバの TCP ポート番号
-V n	LDAP プロトコルのバージョン番号 (2 または 3。デフォルトは 3)
-Z	SSL で暗号化して接続する
-P pathname	SSL 証明書データベースへのパス
-N	SSL クライアント認証に使う証明書の名前
-K pathname	SSL クライアント認証に使うキーデータベースへのパス
-m pathname	セキュリティモジュールデータベースへのパス

表 50 ldapmodify のオプション (続き)

オプション	説明
-W	SSL キーのパスワード
-Q [token] [:certifica te name]	PKCS 11
-X pathname	FORTEZZA 危殆化キーリスト (CKL)
-I pin	カードパスワードファイル
-D binddn	DN をバインドする
-w passwd	パスワードをバインドする (簡易認証用)
-E	サーバにバインド ID の表示 (レポート) を要求する
-R	自動的に参照をたどらない
-O hop lim	たどる参照ホップの最大数
-M	参照を管理する (通常のエントリとして扱う)
-O	LDAP ライブラリのバージョンの不一致を無視する
-i charset	コマンドライン入力のための文字セット (デフォルトはロケール)
-k dir	変換ルーチンディレクトリ (デフォルトは .)
-Y proxydn	プロキシ承認に使われる DN
-H	使用法に関する情報を表示する
-c	継続モード (エラーが発生しても停止しない)
-A	ASCII でない値を -v とともに表示する
-f file	標準入力の代わりに、ファイルから変更を読み取る
-a	エントリを追加する
-b	(bin 属性のために) ファイルから / で始まる値を読み取る
-F	複製行に関係なく、アプリケーションにすべての変更を強制する
-e rejfile	拒否されたエントリを <i>rejfile</i> に保存する
-B suffix	<i>suffix</i> への一括インポート
-q	エントリの追加や変更を行うとき、出力しない

ldapsearch

ldapsearch コマンドを使って、コマンドで指定した文字列を ldap から検索します。

使用法: ldapsearch -b basedn [options] filter [attributes...]

ldapsearch -b basedn [options] -f file [attributes...]

引数は次のとおりです。

表 51 ldapsearch の引数

引数	説明
basedn	検索の Base DN (環境変数 LDAP_BASEDN が設定されている場合、-b フラグは必要ない)
filter	RFC-2254 に準拠する LDAP 検索フィルタ
file	使用する一連の LDAP 検索フィルタを含むファイル
attributes	検索する属性の、スペースで区切られたリスト (属性のリストが指定されない場合、すべて検索される)

オプションは次のとおりです。

表 52 ldapsearch のオプション

オプション	説明
-n	実行予定の内容を表示するが、実際には実行しない
-v	詳細モードで実行する (標準出力の診断)
-h host	LDAP サーバ名または IP アドレス
-p port	LDAP サーバの TCP ポート番号
-V n	LDAP プロトコルのバージョン番号 (2 または 3。デフォルトは 3)
-Z	SSL で暗号化して接続する
-P pathname	SSL 証明書データベースへのパス
-N	SSL クライアント認証に使う証明書の名前
-K pathname	SSL クライアント認証に使うキーデータベースへのパス
-m pathname	セキュリティモジュールデータベースへのパス

表 52 ldapsearch のオプション (続き)

オプション	説明
-W	SSL キーのパスワード
-Q [token] [:certificate name]	PKCS 11
-X pathname	FORTEZZA 危殆化キーリスト (CKL)
-I pin	カードパスワードファイル
-D binddn	DN をバインドする
-w passwd	パスワードをバインドする (簡易認証用)
-E	サーバにバインド ID の表示 (レポート) を要求する
-R	自動的に参照をたどらない
-O hop lim	たどる参照ホップの最大数
-M	参照を管理する (通常のエントリとして扱う)
-0	LDAP ライブラリのバージョンの不一致を無視する
-i charset	コマンドライン入力のための文字セット (デフォルトはロケール)
-k dir	変換ルーチンディレクトリ (デフォルトは .)
-y proxydn	プロキシ承認に使われる DN
-H	使用法に関する情報を表示する
-t	一時ディレクトリ内のファイルに値を書き込む
-U	-t とともにファイルの URL を生成する
-e	値の Base-64 エンコードを最小化する
-u	わかりやすいエントリ名を出力に含める
-o	古い形式を使ってエントリを出力する (デフォルトは LDIF)
-T	長い行を折り返さない (デフォルトでは折り返す)
-1	LDIF 出力で先頭の version: 1 行を省略する
-A	属性名だけを検索する (値は検索しない)
-B	古い形式 (-o) が使われる場合、ASCII でない値を出力する
-x	サーバでソートを実行する

表 52 ldapsearch のオプション (続き)

オプション	説明
-F sep	属性名と値の間に '=' ではなく 'sep' を出力する
-S attr	属性 'attr' で結果をソートする
-s scope	base、one、または sub のいずれか (検索範囲)
-a deref	never、always、search、または find のいずれか (エイリアス遅延処理)
-l time lim	検索の時間制限 (秒単位)
-z size lim	検索のサイズ制限 (エントリ数)
-G before:after:index:count before:after:value	'before' や 'after' は、'index' を囲むエントリ数。'count' はコンテンツ数、'value' は検索する値

productversion

productversion コマンドを使うと、現在インストールされている iPlanet Application Server のバージョンが「製品名 / リリース番号 / サービスパック」の形式で表示されます。

resreg

resreg コマンドは廃止されました。代わりに、iasdeploy コマンドを使います。

rmic

rmic コマンドは、リモートメソッドの呼び出しを実行します。

使用法: rmic [options] class_names

オプションは次のとおりです。

表 53 rmic のオプション

オプション	説明
-keep	中間生成ソースファイルを削除しない
-keepgenerated	

表 53 rmic のオプション (続き)

オプション	説明
-v1.1	1.1 スタブプロトコルバージョンのスタブやスケルトンを作成する
-vcompat	1.1 と 1.2 の両方のスタブプロトコルバージョンと互換性のあるスタブやスケルトンを作成する (デフォルト)
-v1.2	1.2 スタブプロトコルバージョン専用のスタブを作成する
-iiop	IIOP のスタブを作成する。存在する場合は、オプションに次も含まれる -always 現在スタブが表示される場合でも、スタブを作成する -alwaysgenerate "-always" と同じ -nolocalstubs 同じものに最適化されたスタブを作成しない
-idl	IDL を作成する。存在する場合は、オプションに次も含まれる -always 現在 IDL が表示される場合でも、IDL を作成する -alwaysgenerate "-always" と同じ -noValueMethods valuetype のメソッドを生成しない
-g	デバッグ情報を生成する
-depend	期限の切れたファイルを再帰的に再コンパイルする
-nowarn	警告を生成しない
-nowrite	コンパイルされたクラスをファイルシステムに書き込まない
-verbose	コンパイラの動作状況に関するメッセージを出力する
-classpath <i>path</i>	入力クラスファイルの場所を指定する
-sourcepath <i>path</i>	ユーザソースファイルの場所を指定する
-bootclasspath <i>path</i>	bootstrap クラスファイルの場所をオーバーライドする
-extdirs <i>path</i>	インストールされているエクステンションの場所をオーバーライドする
-d <i>dir</i>	生成されるクラスファイルを配置する場所を指定する
-J <i>runtime_flag</i>	Java インタプリタに引数を渡す

servletReg

servletReg コマンドは、アプリケーションサーバで Servlet を登録します。

使用法: `servletReg -i inputFile [-t] [-o outputFile]`

サブコマンドは次のとおりです。

表 54 `servletReg` サブコマンド

サブコマンド	説明
<code>-i</code>	入力 <code>appInfo.ntv</code> ファイルを指定する
<code>-t</code>	GXR ファイルを作成するだけ (Servlet の登録はしない)
<code>-o</code>	出力 GXR ファイルを指定する

webappreg

`webappreg` コマンドは廃止されました。代わりに、`iasdeploy` コマンドを使います。

version

`version` コマンドは、現在インストールされている `iPlanet Application Server` のバージョンを「リリース番号/サービスパック」の短い形式で表示します。

